倉吉市文化財調査報告書　第112集

大平ラ遺跡・八幡山遺跡発掘調査報告書

一般国道３１３号（北条倉吉道路）

道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査

鳥取大学附属図書館
0050294644

平成12年度

倉吉市教育委員会

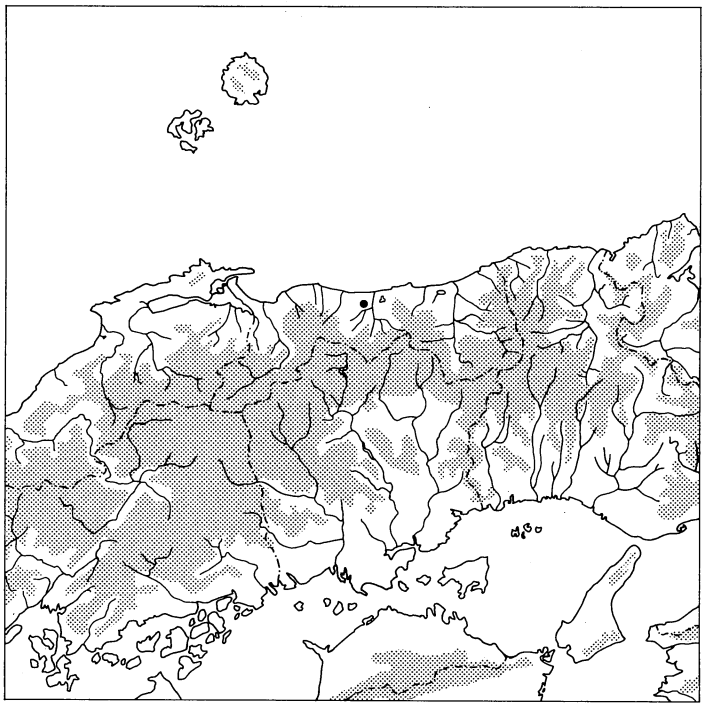
倉吉市文化財調査報告書　第112集

大平ラ遺跡・八幡山遺跡発掘調査報告書

（おおひら　はちまんやま）

一般国道３１３号（北条倉吉道路）

道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査



遺跡略号　大平ラ遺跡４ＤＷＯ・八幡山遺跡３ＮＴＨ

平成12年度

倉吉市教育委員会

序

この報告書は、鳥取県倉吉土木事務所が実施する一般国道313号（北条倉吉道路）道路改良工事に伴い、平成11年度から12年度にかけて倉吉市教育委員会が倉吉市和田字大平ラ・寺谷字八幡山において行った発掘調査の記録です。

この度の調査では、５世紀の終わりに造られた円墳２基を調査し、周溝内に埋葬施設と供献土器が良好な状態で遺存しているのを確認しました。特に、供献土器は当時の状態をよく残しており、古墳祭祀を解明する上で貴重な資料を得ることができました。

発掘調査の記録としてこの報告書が多くの皆様に活用され、文化財に対する理解を深めていただく一助となることを願うものです。

最後になりましたが、調査にあたりご協力いただきました鳥取県倉吉土木事務所をはじめ、関係各位に対し深く感謝の意を表するものです。

平成13年３月

倉吉市教育委員会
教育長　足　羽　一　昭

例　　言

1　本報告書は、一般国道313号（北条倉吉道路）道路改良工事に伴う事前調査として、平成11年度・平成12年度に倉吉市教育委員会が、倉吉市和田字大平ラ・寺谷字八幡山において実施した発掘調査の記録である。

2　発掘調査団は次のような組織・編成である。

団　　長　足羽　一昭（倉吉市教育委員会教育長）

調査委員　名越　　勉（倉吉市文化財保護審議会会長）

調　査　員　根鈴　輝雄（倉吉博物館主任学芸員）　森下　哲哉（文化財係主任）

根鈴智津子（文化財係主任）　加藤　誠司（文化財係主事）

岡本　智則（文化財係主事）　岡平　拓也（文化財係主事）

調査補助員　山根　雅美・松田　恵子・金田　朋子

事　務　局　波田野頌二郎（教育次長　12年９月まで）　景山　　敏（教育次長　12年10月から）

眞田　廣幸（文化課課長）

中井　寿一（文化課課長補佐　12年12月まで）　渡辺　峰寿（文化課課長補佐　13年１月から）

藤井　　晃（文化財係係長）　藤井　敬子（文化財係主任）

山﨑　昌子（文化財係主事）

内務整理　泉　美智子・世浪由美子・松嶋あつ子・竹歳　暁子・山本　錦

妻藤　君江（11年度）・米原　満（12年度）

3　現場での調査は岡本が担当した。内務整理は岡本が担当し、松田・泉・松嶋・山本・米原が補佐した。遺物の写真撮影は森下が担当した。

4　本書の執筆は、各調査員が検討し岡本が行った。

5　予備調査において検出した資料も本報告書に掲載した。

6　第１図（地形図）は建設省国土地理院発行の1：25,000地形図「倉吉」の一部を複製・加筆したものである。第２図（地形図）は、1：2,500国土基本図　倉吉市平面図を使用した。

7　挿図中の方位は、特に注記を行わない限り国土座標第Ⅴ座標系の北を示す。

8　遺物に付した記号・番号は、本文・挿図・図版で統一している。

9　調査によって得られた資料は、倉吉市教育委員会が保管している。

本　文　目　次

Ⅰ　発掘調査に至る経過 …… 1
Ⅱ　位置と歴史的環境 …… 1
Ⅲ　大平ラ遺跡 …… 5
　1　遺構 …… 6
　2　遺物 …… 11
　3　まとめ …… 18
Ⅳ　八幡山遺跡 …… 21
　1　遺構 …… 22
　2　遺物 …… 22
　3　まとめ …… 22
報告書抄録

挿　図　目　次

第1図　倉吉市周辺の地形と遺跡分布図 …… 3
第2図　大平ラ遺跡・八幡山遺跡調査区位置図 …… 4
第3図　大平ラ遺跡遺構全体図 …… 5
第4図　1号・2号墳調査前地形測量図 …… 6
第5図　1号・2号墳遺構図 …… 7
第6図　1号墳1号～4号埋葬施設遺構図 …… 10
第7図　2号墳主体部、1号土壙遺構図 …… 11
第8図　大平ラ遺跡出土土器1 …… 13
第9図　大平ラ遺跡出土土器2 …… 14
第10図　大平ラ遺跡出土土器3 …… 15
第11図　大平ラ遺跡出土鉄製品・銅製品・石製品 …… 17
第12図　八幡山遺跡遺構全体図・断面図、出土土器 …… 21

図　版　目　次

図版1　大平ラ遺跡　調査前遠景　1号墳完掘
図版2　大平ラ遺跡　1号墳東側周溝埋土　1号墳周溝内供献土器出土状況　1号墳1号埋葬施設
　1号墳2号埋葬施設　1号墳3号埋葬施設　1号墳4号埋葬施設
図版3　大平ラ遺跡　2号墳　2号墳周溝内供献土器出土状況　2号墳東側周溝埋土　2号墳主体部
　1号土壙
　八幡山遺跡　遠景　全景
図版4　大平ラ遺跡　1号墳出土土器

図版５　大平ラ遺跡　２号墳出土土器

図版６　大平ラ遺跡　１号・２号墳出土土器

図版７　大平ラ遺跡　鉄刀・刀子・不明銅製品・敲石

　　八幡山遺跡　弥生土器

Ⅰ　発掘調査に至る経過

平成８年度、一般国道313号（北条倉吉道路）道路改良工事の計画が、鳥取県から倉吉市教育委員会に提示された。その計画は、東伯郡北条町地内の国道９号線から倉吉市和田地内まで、国道313号線沿いに並行して総延長4.4kmのうち倉吉側約1.7kmについて道路を新設するものである。当該地とその周辺を現地踏査した結果、遺物散布が確認され、遺跡の存在が想定された。倉吉市教育委員会は、遺跡の存在とその範囲を確定するため、平成９年11月から平成10年１月にかけて試掘調査を実施[註1)]した。試掘調査の結果、八幡山遺跡（倉吉市寺谷字八幡山）、若林遺跡（字若林・字北石坂平）、長谷遺跡（字長谷）、大平ラ遺跡（和田字大平ラ）において人工的な平坦部や古墳の周溝を確認し、遺跡の所在が明らかとなった。倉吉市教育委員会は、鳥取県倉吉土木事務所と協議を行い、このうち平成10年度・11年度の２カ年にわたって若林遺跡6,940㎡の発掘調査を実施[註2)]した。

今回の発掘調査も、倉吉市教育委員会が主体となって鳥取県倉吉土木事務所から委託を受け、大平ラ遺跡の1,680㎡を平成12年３月10日～３月24日、５月25日～９月１日、八幡山遺跡の120㎡を平成12年７月10日～８月23日まで実施した。

註

1　岡本智則　「和田地区」『倉吉市内遺跡分布調査報告書Ⅹ』　倉吉市教育委員会　1999

2　岡本智則　『若林遺跡発掘調査報告書』　倉吉市教育委員会　2000

Ⅱ　位置と歴史的環境

大平ラ遺跡は、倉吉市街地から北方へ約2.5km離れた倉吉市和田字大平ラに所在する。本遺跡は、通称大山（標高197.6m）の西側に所在する、四王寺山にむかって延びる丘陵尾根中腹の標高約45m付近に位置する。水田面との比高差は約23mを測る。遺跡の所在する西側に既存の国道313号線が南北方向に延びており、丘陵尾根を切断する。本遺跡からの眺望は、南から南西側にかけて倉吉平野の南西側から遙か中国山脈を見渡せるが、東側は尾根続きに大山、西側と北側はそれぞれ谷を挟んで丘陵が連なり、三方を囲まれる。

本遺跡と谷を挟んだ北側の丘陵尾根から南斜面にかけては、横穴式石室を主体部とする円墳を調査した若林遺跡(43)が所在する。また、西側には、隣接する四王寺山との間にある独立丘陵上に、竪櫛が出土した９号墳(60)をはじめとする４世紀末から５世紀代の屋喜山古墳群(59)が所在する。さらに同一丘陵の東側には、弥生時代後期から古墳時代後期にかけての古墳群と集落跡が広がる夏谷遺跡(58)が所在する。

八幡山遺跡は、倉吉市街地から北方へ約3.5km離れた北条町との境にあたる倉吉市寺谷字八幡山に所在する。大平ラ遺跡の所在する丘陵の谷を挟んだ北側丘陵から、さらに北に派生した丘陵尾根のほぼ先端の標高約20m付近に位置する。この丘陵尾根は、大山から北に延びる丘陵と蜘ヶ家山とに挟まれた南北に狭い平野部に向かって延びる。水田面との比高差は約15mを測る。本遺跡からの眺望は、北側の平野部に開けている以外は三方を山塊に囲まれる。

海岸部につながるこの狭い平野部では、縄文時代前期から晩期にかけての島遺跡(10)が所在しており、土器・石器・動物骨格片・丸木舟・貝塚などが出土している。この他、中期の土器・火鑽臼・住居の用材とみられる木製品が出土した米里船渡遺跡(16)、北尾遺跡(９)など縄文時代の遺跡が水田下から確認されている。また、本遺跡と直線距離にして約100m離れた、本丘陵と並行して北に延びる尾根の最北端には、外縁付紐式四区袈裟襷文

銅鐸が出土した米里銅鐸出土地(20)が所在する。

周辺の遺跡の分布状況を第１図の範囲で見てみると、古墳時代を中心に旧石器時代から奈良・平安時代の遺跡まで数多くの遺跡が分布している。以下、弥生時代から古墳時代を中心に述べる。

弥生時代は、大山の火山活動により形成された、倉吉市西郊の久米ヶ原丘陵を中心に集落跡が存在する。弥生時代中期には福田寺遺跡・遠藤谷峯遺跡・中峯遺跡・中尾遺跡(71)・沢ベリ遺跡(67～69)・西前遺跡(41)が確認されているにすぎないが、後期になると急激な人口増加とともに集落が拡散する。

墳墓は、弥生時代前期の土壙墓群としてイキス遺跡・向山古墳群宮ノ峰支群がある。弥生時代後期は、阿弥大寺四隅突出型墳丘墓群・山根（藤和）四隅突出型墳丘墓・柴栗墳丘墓(39)・三度舞墳丘墓(61)・大谷後ロ谷墳丘墓群などがある。終末期から古墳時代初頭にかけては、土壙墓群から古墳へと変遷していく過程がうかがえる二タ子塚遺跡・中峰古墳群(56)がある。

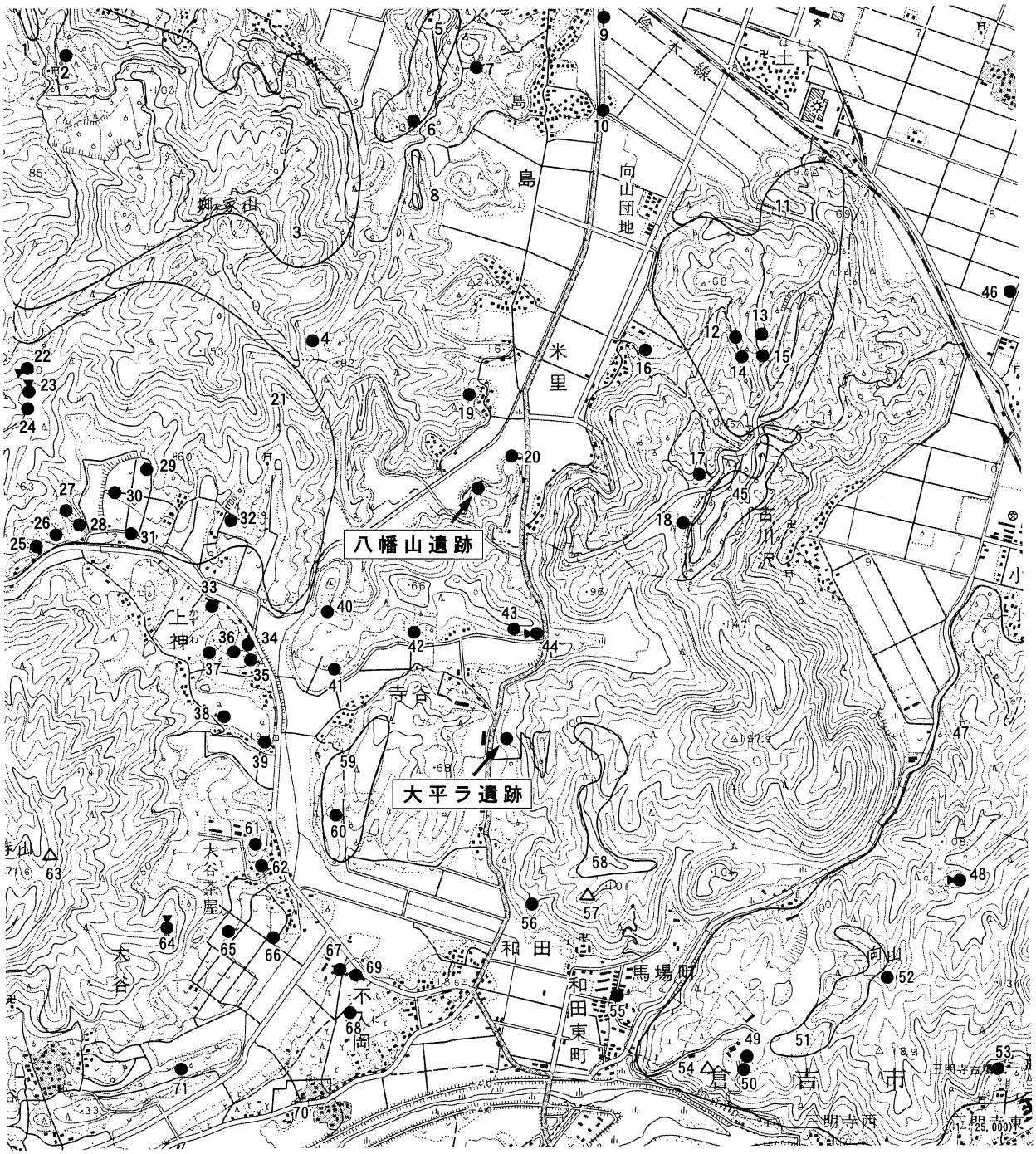
古墳時代前期の首長墓は、粘土槨を主体部とし、鼕鳳鏡・三角縁神獣鏡・二神二獣鏡、多量の鉄器が出土した国分寺古墳（前方後方墳？・全長60m)、竪穴式石槨を主体とし国分寺古墳とほぼ同時期に築造された宮ノ峰支群19号墳（方墳・一辺27m)・21号墳（円墳・直径30m）を初現とする。次に東郷湖周辺に馬ノ山２号墳（前方後円墳・全長68m)・４号墳（前方後円墳・全長100m)、宮内狐塚古墳（前方後円墳・全長95m）が築造される。馬ノ山４号墳は長大な竪穴式石槨を主体部とし、舶載の三角縁神獣鏡等豊富な遺物が出土している。５世紀代には、山陰地方で最大規模をもち、銘文のある舶載の龍虎文鏡が出土した北山古墳（前方後円墳・全長110m)、仿製の三角縁神獣鏡と変形六獣鏡、碧玉製鍬形石、滑石製琴柱形石製品などが出土した上神大将塚古墳（38・円墳・直径22m）が築造される。

４世紀後半頃から、直径十数m前後の中小の円墳が増加する。４世紀から５世紀前半の方墳群の宮ノ峰支群、４世紀末から５世紀代の猫山遺跡(34～37)・屋喜山古墳群・方墳群の養水古墳群、５世紀後半の円墳群のイザ原古墳群(66)・小林古墳群(65)、下張坪遺跡(45)・駄道東古墳群、供献土器の遺存状態が良好な立道東古墳群・大山遺跡・東山田１号墳、６世紀中頃まで続き箱式石棺から横穴式石室へと変遷するクズマ遺跡１次(26)など、５世紀代を中心に丘陵上に箱式石棺を主体とした円墳群が形成される。

東伯耆に横穴式石室が導入されたのは、６世紀前半になる。ドーム状に小口積みした天井に仕切石や石棚などの施設をもつ大宮古墳（円墳・直径30m)、箱式石棺の伝統を色濃く引く独特の石室形態の片平４号墳（円墳・直径15m)、竪穴系横口式石室の系譜を引く上種東３号墳（円墳・直径12m）など、異なった石室形態のものがほぼ同時期に導入された。６世紀の後半頃、石屋形を簡略化した石室構造をもつ向山６号墳（48・前方後円墳・全長40m）築造以降、石室構造は簡略化が進む。７世紀の中頃から後半にかけては取木遺跡・一反半田遺跡・郊家平古墳群など、横穴式石室の規模も極端に矮小するなかで、７世紀になって間もなく築造された三明寺古墳（53・円墳？・直径18m・国史跡)、７世紀の中頃に精美な切石を用いた福庭古墳（円墳・径〈一辺〉35m）は、石室の規模・石工技術において隔絶した存在である。

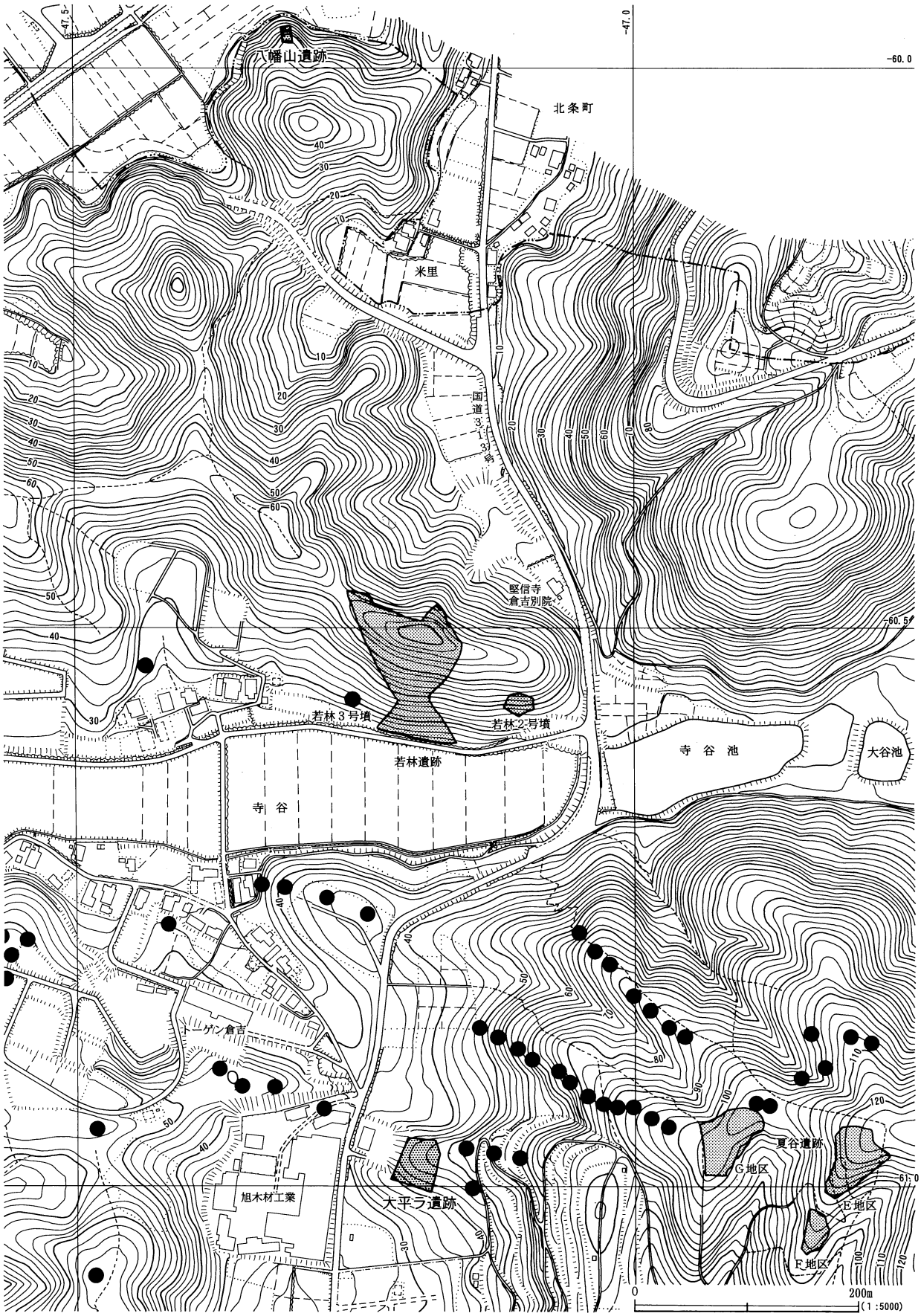
古墳時代の集落は、現在20以上を確認している。後中尾遺跡・夏谷遺跡では50棟以上の住居跡が重なり合っ

1　曲管峯長谷遺跡	7　島苅山遺跡	13　土下211号墳	19　米里三ノ嵜遺跡	25　上神119号墳
2　曲宮ノ前遺跡	8　島古墳群	14　土下212号墳	20　米里銅鐸出土地	26　クズマ遺跡１次
3　曲古墳群	9　北尾遺跡	15　土下213号墳	21　上神古墳群	27　クズマ遺跡２次
4　曲226号墳	10　島遺跡	16　船渡遺跡	22　上神44号墳	28　イガミ松遺跡
5　北尾古墳群	11　土下古墳群	17　米里第１遺跡	23　上神48号墳	29　谷畑遺跡
6　北尾釜谷遺跡	12　土下210号墳	18　米里第２遺跡	24　上神51号墳	30　西山遺跡

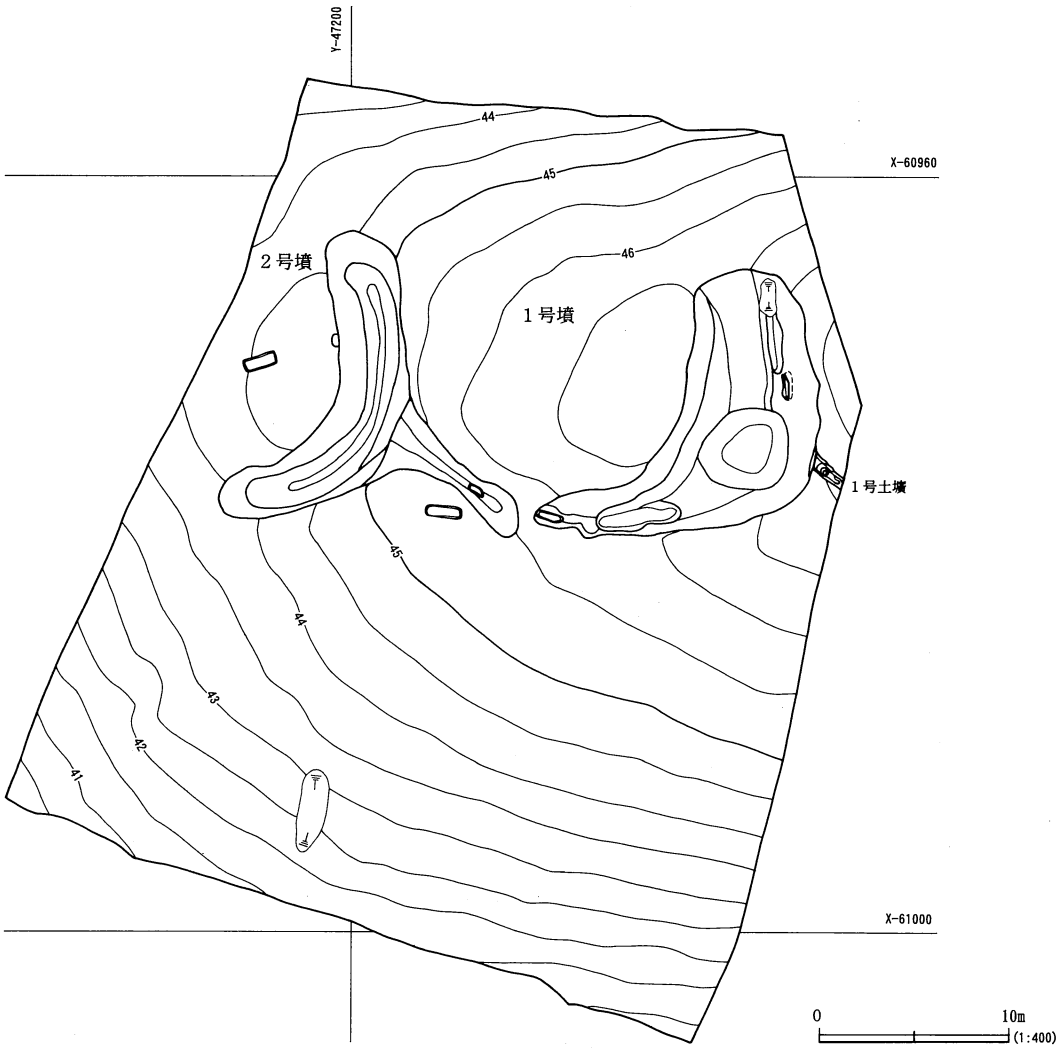


第１図　倉吉市周辺の地形と遺跡分布図

31　桜木遺跡	40　トドロケ遺跡	49　向山309号墳	58　夏谷遺跡	67　沢ベリ遺跡１次
32　上神宮ノ前遺跡	41　西前遺跡	50　向山310号墳	59　屋喜山古墳群	68　沢ベリ遺跡２次
33　東狭間古墳	42　西前１号墳	51　長谷遺跡	60　屋喜山９号墳	69　沢ベリ遺跡３次
34　猫山遺跡１次	43　若林遺跡	52　三明寺大将塚古墳	61　三度舞墳丘墓	70　不入岡遺跡
35　猫山遺跡２次	44　若林２号墳	53　三明寺古墳	62　イザ原遺跡	71　中尾遺跡
36　猫山遺跡３次	45　下張坪遺跡	54　和田東城跡	63　大谷城跡	
37　猫山遺跡４次	46　上通遺跡	55　平ル林遺跡	64　大谷大将塚古墳	
38　上神大将塚古墳	47　向山古墳群	56　中峰古墳群	65　小林古墳群	
39　柴栗古墳群	48　向山６号墳	57　和田城跡	66　イザ原古墳群	



第2図　大平ラ遺跡・八幡山遺跡調査区位置図



第3図　大平ラ遺跡遺構全体図

て検出された。他に、後ロ谷遺跡、西山遺跡(30)、桜木遺跡(31)、西前遺跡(41)、クズマ遺跡1・2次(26・27)がある。また、不入岡遺跡(70)では住居内よりオンドル状遺構が検出され、非在地系の土器が出土した。

奈良時代に入ると久米ヶ原丘陵の東端部周辺に伯耆国庁・伯耆国分寺・伯耆国分尼寺、国府関連遺跡と推定されている不入岡遺跡が近接して設けられ、伯耆国の政治・文化の中心地となる。

Ⅲ　大平ラ遺跡

調査区内の尾根部分は、戦後の畑地造成により旧地形が削平されており、墳丘の高まりは確認できなかったが、試掘調査によって、尾根を切断する2条の溝を確認していたため、2～3基の古墳を想定して調査を行った。

調査は、墳丘および周辺の地形測量を行い、地形図（1:100）を作成し、調査区の東側を1号墳、西側を2号墳とし、それぞれを4区画に分け、各区に断面観察用のベルトを設定して掘り下げた。主体部の調査は、2号墳で耕作土を除去し、箱式石棺の基底部を検出した。墳丘は、土層観察用のベルトを残して表土を除去した時点で、旧地表面である黒色土を検出したため、盛土が遺存しないことを確認した。周溝は、埋土を排除して完掘し、埋葬施設及び供献土器を検出した。墓壙は、掘り方を確認し、掘り下げて墓壙底を確認した。墳丘上の黒色土を除去し、墳丘下の遺構の有無を確認し調査を終了した。遺構の測量は、国土座標による4mメッシュを組み、主体

第４図　１号・２号墳調査前地形測量図

部と遺物出土状況図については10分の１で、その他の遺構は20分の１の縮尺で実測した。調査地の地形測量は、平板を使用し、100分の１、25㎝毎の等高線で測量した。

調査地の基本層序は、Ⅰ層：茶褐色土（耕作土）、Ⅱ層：黒色土（クロボク）、Ⅲ層：橙褐色土（礫混じり粘質土）、Ⅳ層：黄褐色土（大山・倉吉軽石層）である。遺構検出は、墳丘部分ではⅡ層上面、古墳以外の部分ではⅢ層ないしⅣ層上面で行った。

調査後の面積は、1,680㎡（うち500㎡の表土除去を平成11年度に実施）である。調査の結果、円墳２基、土壙１基を検出した。

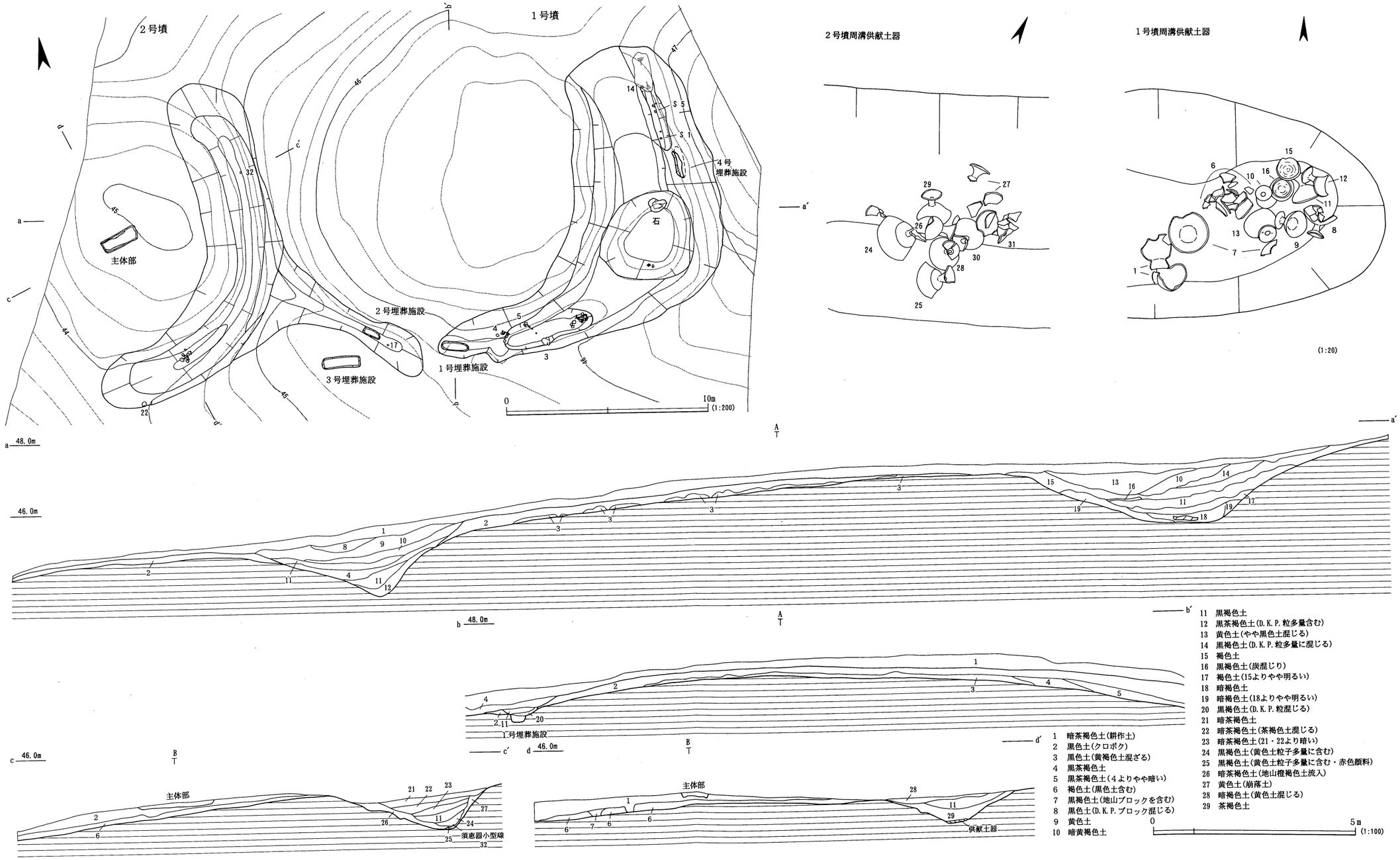
１　遺構

１号墳

西に向かって延びる丘陵尾根中腹に位置する円墳で、すぐ西側の２号墳と切り合う。周溝埋土の土層断面の観察により２号墳より古い。規模は、直径約15.5m、周溝を含めた東西直径約25.5mを測る。周溝底から遺存する墳丘頂部までの高さは1.35mである。

墳丘　表土除去後に自然の黒色土層が確認できたため、自然地形をそのまま利用し旧表土の黒色土面から盛土していたと推測される。また、周溝埋土上層に周溝壁面と同様の黄色土が、最大55㎝程の厚さで流れ込むように堆積していることから、周溝掘り下げ時の土が盛土されていたと考えられる。北西側を中心に、流土中から土師器大型壷(２)・須恵器甕(18)・須恵器樽型瓦(19)が出土した。

周溝　墳丘の北東側から南西側に半円状に巡るが、南側は一部途切れ、西側は２号墳の周溝に切られる。墳丘の北側は、黒色土が厚く堆積しており、平・断面の観察でも周溝を確認できなかった。断面形は、南東側の底面が平らで逆台形である他は、緩やかなU字状を呈する。検出面での幅は南東側が最大で7.7mを測り、南側が最小



第5図　1号・2号墳遺構図

で1.0mと狭くなる。検出面からの深さも南東側が最も深く1.50mを測り、南側が0.25mと浅い。南東側の底で0.9×0.6mの板石が水平な状態で出土したため、石蓋土壙墓を想定し精査したが、墓壙は検出できなかった。板石除去後、周溝底は直径約4.5m、周溝底から約0.4m深くなり不整円形な土壙状を呈する。出土遺物はなかった。

主体部　主体部は、墳丘が畑地造成により掘削され遺存していないが、表土除去中に一辺20㎝前後、厚さ２～３㎝大の板石が多くみられたため、２号墳の主体部が箱式石棺墓であることを考えると、同様に箱式石棺墓が想定される。墳丘中央付近の耕作土中から鉄刀片（Ｆ１）が出土した。副葬品の可能性が考えられる。

１号埋葬施設　南側の周溝底部に位置する土壙墓である。主軸は周溝に平行する。墓壙の平面形は隅丸長方形で、検出面の規模は長さ1.39m・幅0.38m、検出面から墓壙底までの深さ0.17mを測る。底面の東小口幅0.32m、西小口幅0.42mを測る。墓壙底はほぼ水平である。頭位は西側と推定される。出土遺物は、墓壙内西側埋土中から須恵器甕(17)片が出土した。この甕片と同一個体の破片が２号埋葬施設寄りの周溝検出面からも出土しており、墳丘からの転落と考えられる。

２号埋葬施設　南西側の周溝底部にある土壙墓で、１号埋葬施設の西側に位置し、中心間距離は約4.2mを測る。主軸は周溝に平行する。墓壙の平面形は隅丸長方形で、検出面の規模は、長さ0.83m・幅0.32m、検出面からの深さ0.14mを測る。底面の東小口幅0.19m、西小口幅0.21mを測る。墓壙底は西側が３㎝高い。頭位は西側と推定される。出土遺物は、墓壙西側の検出面、ほぼ周溝底の深さで刀子片（Ｆ２）が出土した。

３号埋葬施設　南西側の周溝外にある土壙墓で、２号埋葬施設の南西に位置し、中心間距離は約2.0mを測る。主軸は周溝にほぼ平行する。墓壙の平面形は隅丸長方形で、検出面の規模は、長さ1.82m・幅0.53m、検出面からの深さ0.31mを測る。底面の東小口幅0.42m、西小口幅0.44mを測る。埋土の堆積状況と断面の立ち上がりから、内法で長さ1.5m前後、幅0.32m程度の木棺が納められていたと推定される。副葬品は出土しなかった。

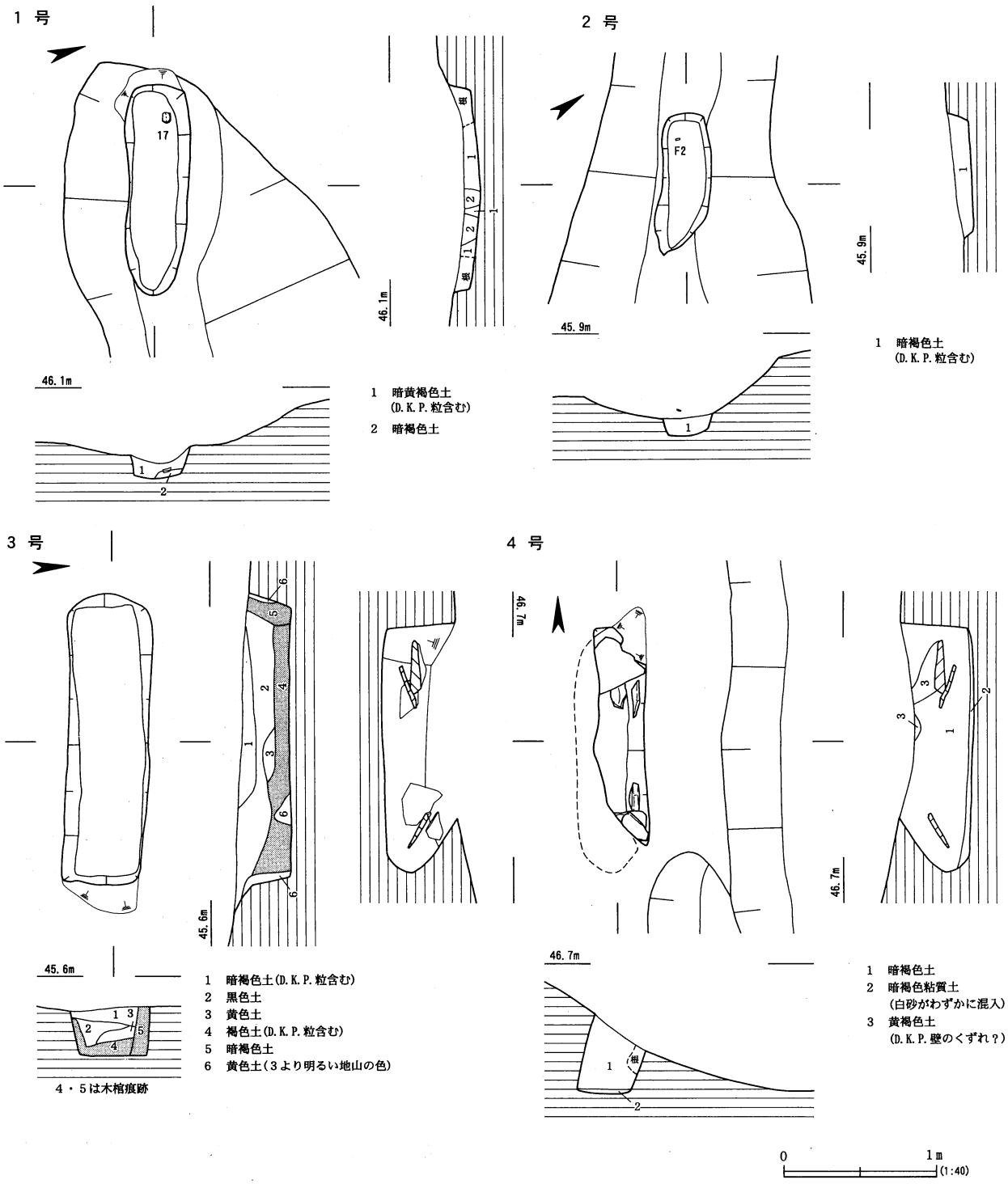
４号埋葬施設　東側の周溝底部外寄りに位置し、周溝の壁を掘り込むように造られる。主軸は周溝に平行する。検出面の規模は、長さ1.25m・幅0.33m、検出面からの深さ0.30mを測る。底面の長さ1.49m、幅は0.36mを測る。北小口幅は0.34m、南小口幅は0.28mを測る。墓壙底は北側が４㎝高い。頭位は北側と推定される。両小口寄りには、15～35㎝大の板石がそれぞれ３枚ずつ落ち込んでいた。このうち北側では25㎝大、南側では20㎝大の板石がそれぞれ１枚ずつ西側壁に張り付くように垂直に立てられていた。棺痕跡は確認できなかったものの、木材と石材を組み合わせた棺であったと推定される。副葬品は出土しなかった。

出土遺物　南側周溝底で土師器高坏８個体（６～13）、土師器直口壷（１）、須恵器蓋坏(15・16)のセットが一括で出土した。これらは周溝内の東西約0.9mの範囲にまとまって出土した。高坏（７）は正位で、(10・13)は逆位で、その他の高坏は倒位であった。須恵器坏蓋(15)は逆位で、坏身(16)は正位で、逆位の高坏(10)の坏部の上に重ねた状態であった。この供献土器群の西側約1.2m離れた周溝外縁線に土師器甕（３）、周溝内縁線に土師器中型甕（４・５）が出土した。東側周溝底外寄りで土師器埦(14)が正位で出土した。墳丘北西側を中心に、流土中より土師器大型壷（２）が出土した。

２号墳

１号墳の西側に位置し、周溝の東側が１号墳を切る。墳丘は、西側の尾根が削られているため、２分の１ないし３分の１が消失する。周溝から墳丘規模を復元すると、直径約12m、周溝を含めた直径約19mの円墳と推定される。周溝底から遺存する墳丘頂部までの高さは1.3mである。

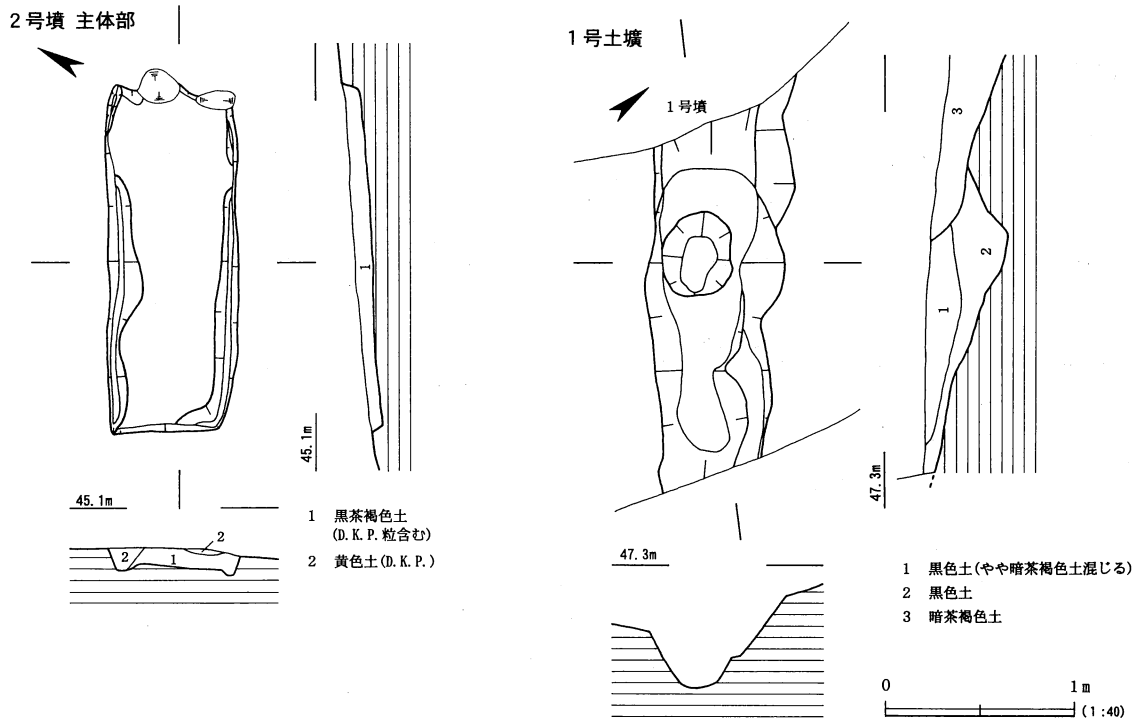
墳丘　１号墳同様表土除去後に自然の黒色土層が確認できたため、自然地形をそのまま利用し旧表土の黒色土面から盛土したと推測される。墳丘北東側を中心に流土中から土師器大型壷(20)が出土した。



第6図　1号墳1号～4号埋葬施設遺構図

周溝　墳丘の西側が遺存しないが、北東側と南西側がともに浅くなり途切れることから、墳丘の北東から南側にかけて半周したものと推定される。東側は1号墳の周溝と切り合う。断面形は、東側の周溝底は幅が狭くV字状を呈するが、南側は浅いU字状を呈する。検出面での幅は東側が最大で3.8mを測り、南西側が最小で2.7mと狭い。検出面からの深さも、東側が最も深く1.5mを測り、南西側が0.35mと浅い。

主体部　主体部は、墳丘が畑地造成により削平されており、墓壙底部が僅かに遺存している。検出時の平面プランは、両小口側を側板が挟み込む形をしており、掘り方内には2～3㎝大の板状の石材片が数点みられることか



第7図　2号墳主体部、1号土壙遺構図

ら箱式石棺墓が推定される。石棺規模は、内法で長さ1.70m・幅0.48m、検出面からの深さ0.08mを測る。底面の東小口幅0.55m、西小口幅0.44mを測り、墓壙底は東側が7㎝高い。頭位は東側と推定される。棺内からの出土遺物は無かった。

出土遺物　南側周溝底から墳丘裾部にかけて土師器高坏8個体(24～31)が一括で出土した。これらは周溝内の東西約0.8mの範囲にまとまって出土した。24・25・28は周溝底で逆位、他は墳丘裾部で、29・30は逆位、26・27・31は倒位であった。この供献土器群から西側へ約3m離れた周溝底外寄りで土師器甕(22)が出土した。また、東側周溝底で須恵器甕(32)が正位で出土した。

1号土壙

1号墳の南東側に位置し、周溝外縁線を切る。主軸方向はN128°Eである。平面形は歪で不明瞭。土壙の両端は、東側は調査区外、西側は1号墳の周溝に切られるため不明。掘り方規模は、底面の長さ1.23m、幅0.42m、検出面からの深さ0.39mを測る。底面のほぼ中央に、長さ0.46m、幅0.38mの楕円形で、底面からの深さ0.16mの規模の土壙がある。土壙内からの出土遺物はなく、時期・性格ともに不明。

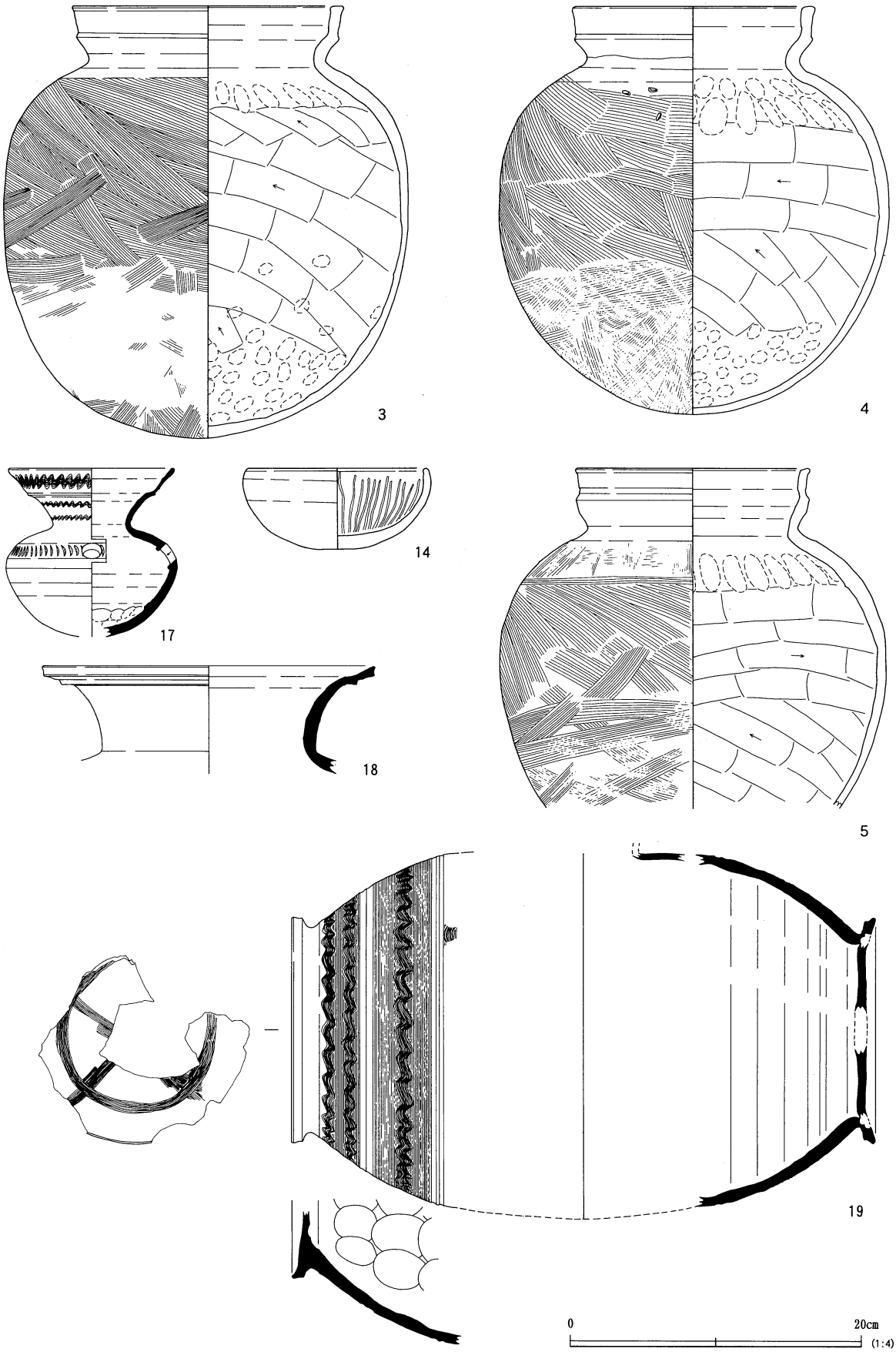
2　遺物

遺物は、土師器・須恵器・鉄製品・不明銅製品・石製品が出土した。弥生土器も出土したが、遺構外であったため割愛した。以下、遺物の説明は、表に一括した。須恵器は器壁断面を墨で塗りつぶして図化した。

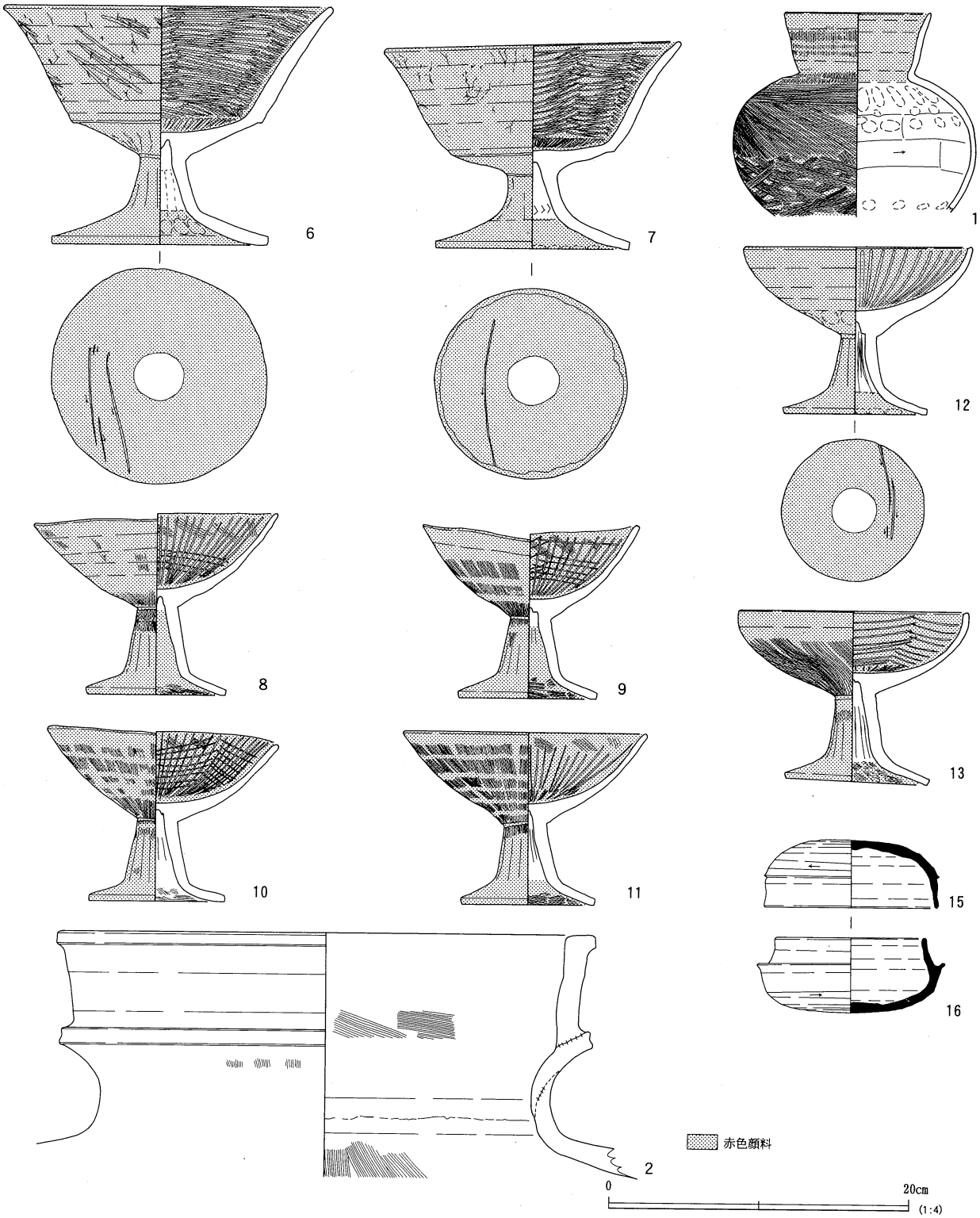
土器観察表

〔法量（　）は推定値〕

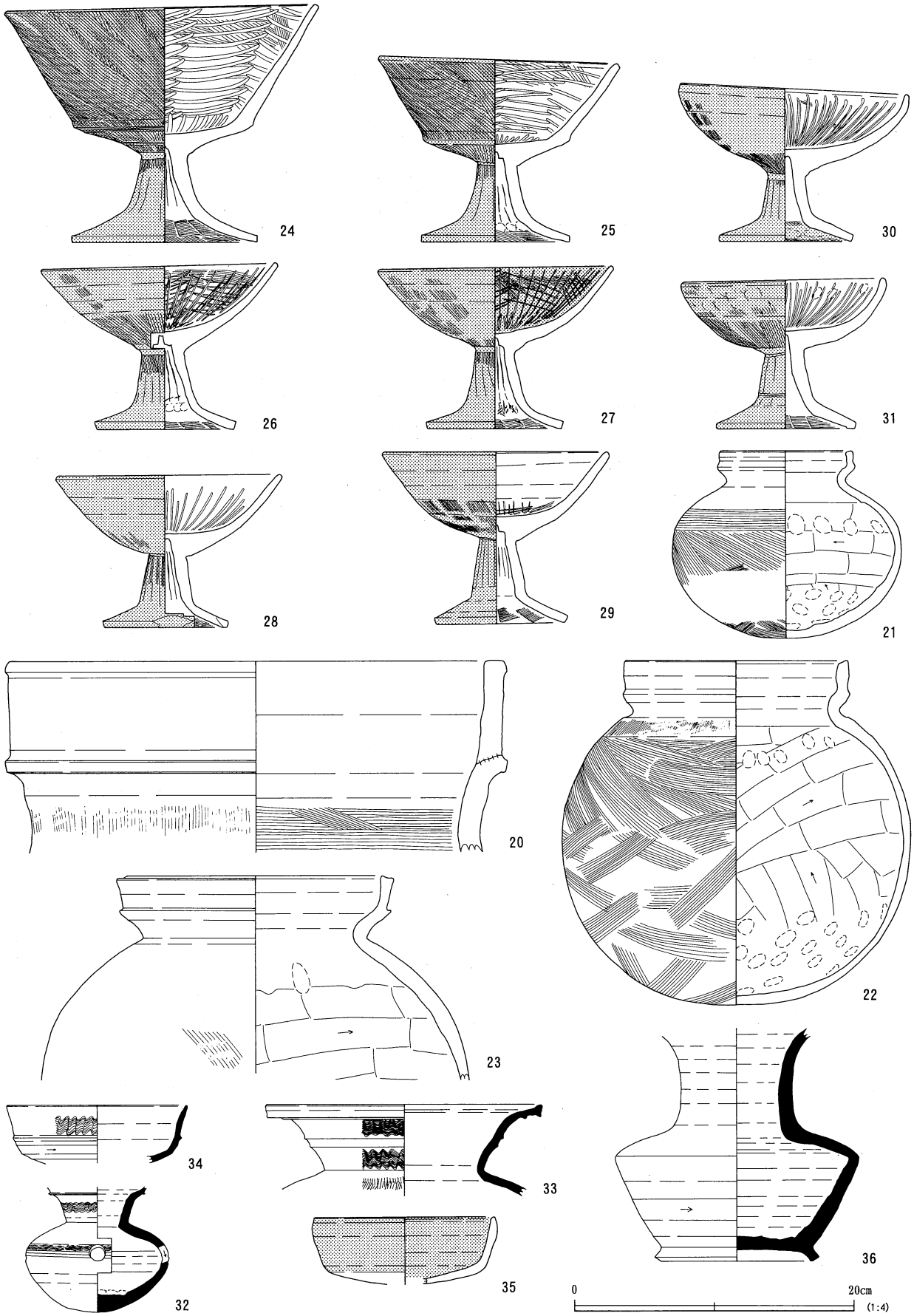
出土位置	No.	器種	法量(cm)	形態	手法	胎土　焼成　色調　遺存度
1号墳 南側周溝底	1	直口壺	口径　9.6 最大胴径 16.2	口縁部は、外方に直線的にのび、口縁端部は丸くおさめる。体部はなで肩の肩部に続き胴部は大きく張る。体部扁球形。	口縁部内外面ヨコナデ。口縁部外面縦方向のハケメ残る。体部外面ハケメ調整。胴部内面横方向のヘラケズリ。肩部内面指頭圧痕。底部内面棒状工具による圧痕。	1㎜以下の砂粒を含む。焼成良好。橙褐色。底部欠損。口縁部内外面、体部外面赤色顔料塗彩。
1号墳 墳丘北西側	2	壺	口径　(33.0)	大型。退化した二重口縁。	口縁部内外面ヨコナデ。頸部内面横方向のハケメ。頸部外面縦方向のハケメ残る。体部内外面ハケメ調整。	8㎜以下の砂粒を含む。焼成普通。淡褐色。口縁部～頸部約1/6遺存。頸部内面黒色物質付着。
1号墳 南側周溝底	3	甕	口径　17.2 最大胴径 28.1 器高　29.8	口縁部は退化した二重口縁で、3は外方気味に立ち上がる。口縁端部は、3・4は水平、5は内側に面をもち、3は内外に、4・5は外方に肥厚する。体部は、3はやや肩が張る倒卵形、4・5はなで肩で球形。4は肩部外面棒状工具による刺突痕3個あり。	口縁部内外面ヨコナデ。4は頸部外面粘土紐痕跡残す。体部外面ハケメ調整。肩部内面及び底部内面指頭圧痕。4は底部内面棒状工具による圧痕。	3㎜以下の砂粒を含む。焼成良好。淡黄褐色。口縁部約1/6欠損。体部外面煤付着。
	4		口径　15.3 最大胴径 26.7 器高　28.1			3㎜以下の砂粒を含む。焼成良好。淡黄褐色。口縁部約1/3欠損。体部外面煤付着。
	5		口径 15.5～16.8 最大胴径 26.4			3㎜以下の砂粒を含む。焼成良好。淡黄褐色。底部欠損。体部外面煤付着。
	6	高坏	口径　21.6 脚径　14.3 器高　16.0	6・7は大型で、口縁部は直線的に外方にのび、口縁端部はわずかに外反し丸い。口縁部と坏底部との境に稜をもつ。8～11は皿状で、口縁部は直線的に上外方にのび、口縁端部は丸くおさめる。12・13は椀状で内湾気味。口縁端部は丸くおさめる。脚部は上位が先すぼまりで、下位が外方に開く柱状部と外方に大きく開く裾部。6・7は太短の脚部。脚部との接合は差し込み式。坏部と脚部との境に1条の沈線をめぐらす。柱状部から脚部にかけて強く屈曲する。6・7・12は裾部内面にヘラ記号あり。	6・7・12・13は坏部内外面ヨコナデ。6・7は型取り後の粘土のしわを残す。8～11は坏部外面縦方向のハケメ後ナデ。坏部内面は、6・7・13は六角形状横方向のヘラミガキ。8・9は五角形状。10は四角形状横方向のヘラミガキ後放射状の密なヘラミガキでハケメ残す。12は放射状の疎なヘラミガキ。6・7・11は坏底部放射状のヘラミガキで、6は密な2段。柱状部外面面取り、内面は6・7以外は絞り目残る。6・7は裾部内面指頭圧痕、8～13は横方向のハケメ。	2㎜以下の砂粒を含む。焼成良好。赤褐色。完形。内外面赤色顔料塗彩。
	7		口径　19.5 脚径　12.9 器高　14.0			2㎜以下の砂粒を含む。焼成良好。赤褐色。完形。内外面赤色顔料塗彩。
	8		口径　16.0 脚径　9.2 器高　12.2			2㎜以下の砂粒を含む。焼成普通。淡黄褐色。完形。内外面赤色顔料塗彩。焼きひずみ著しい。
	9		口径　14.1 脚径　9.1 器高　11.7			1㎜以下の砂粒を含む。焼成良好。淡黄褐色。完形。内外面赤色顔料塗彩。焼きひずみ著しい。
	10		口径　15.1 脚径　9.0 器高　11.7			1㎜以下の砂粒を含む。焼成良好。淡黄褐色。完形。脚部内面を除き赤色顔料塗彩。焼きひずみ著しい。
	11		口径　16.1 脚径　8.7 器高　11.6			1㎜以下の砂粒を含む。焼成普通。淡黄褐色。完形。外面・裾部内面赤色顔料塗彩。焼きひずみ著しい。
	12		口径　(15.1) 脚径　9.5 器高　11.2			1㎜以下の砂粒を含む。焼成普通。赤褐色。口縁部約1/2欠損。外面・裾部内面赤色顔料塗彩。
	13		口径　15.1 脚径　9.4 器高　11.7			3㎜以下の砂粒を含む。焼成良好。赤褐色。完形。外面・裾部内面赤色顔料塗彩。
1号墳 北東側周溝底	14	椀	口径　12.2 器高　5.6	口縁部は内湾し口縁端部は丸くおさめる。	口縁部内外面ヨコナデ。内面放射状の暗文風のヘラミガキ。	3㎜以下の砂粒を含む。焼成良好。暗黄褐色。ほぼ完形。
1号墳 南側周溝底	15	須恵器 坏蓋	口径　11.4 器高　4.6	小型。天井部と口縁部を分ける稜は短く鋭さに欠ける。口縁端部は丸い。	天井部外面時計回りのヘラケズリ。	1㎜以下の砂粒を含む。焼成良好。淡青灰色。口縁端部約1/4欠損。外面ボロ付着。
	16	須恵器 坏身	口径　9.8 器高　5.1	小型。立ち上がりは長く内傾する。口縁端部は丸い。	底部外面時計回りのヘラケズリ。底部内面一方向の仕上げナデ。底部内面粘土紐痕跡を残す。	1㎜以下の砂粒を含む。焼成良好。淡青灰色。完形。
1号墳 南側周溝埋土	17	須恵器 小型甕	口径　(11.2) 最大胴径 (11.8)	口縁部は、一旦外反して段をもち上外方へのびる。頸部と口縁部との境界にはわずかにつまみだした稜をもつがあまい。口縁部外面、頸部外面櫛描波状文がめぐる。最大胴部外面櫛描列点文がめぐる。体部はやや肩が張るいちじく形。胴部最大位に円孔を穿つ。	口縁部内外面ヨコナデ。底部内面棒状工具による圧痕。	1㎜以下の砂粒を含む。焼成良好。淡灰色。口縁部欠損。体部約1/6欠損。緑色の自然釉が認められる。
1号墳 墳丘北西側	18	須恵器 甕	口径　(22.6)	中型。口縁部は朝顔形に外反し、端部は上下に稜をもつ。口縁端部近くに断面三角形の突帯を1条めぐらす。	口縁部内外面丁寧なヨコナデ。	1㎜以下の砂粒を含む。焼成普通。青灰色、断面赤紫色。口縁部から頸部約1/3遺存。



第８図　大平ラ遺跡出土土器１



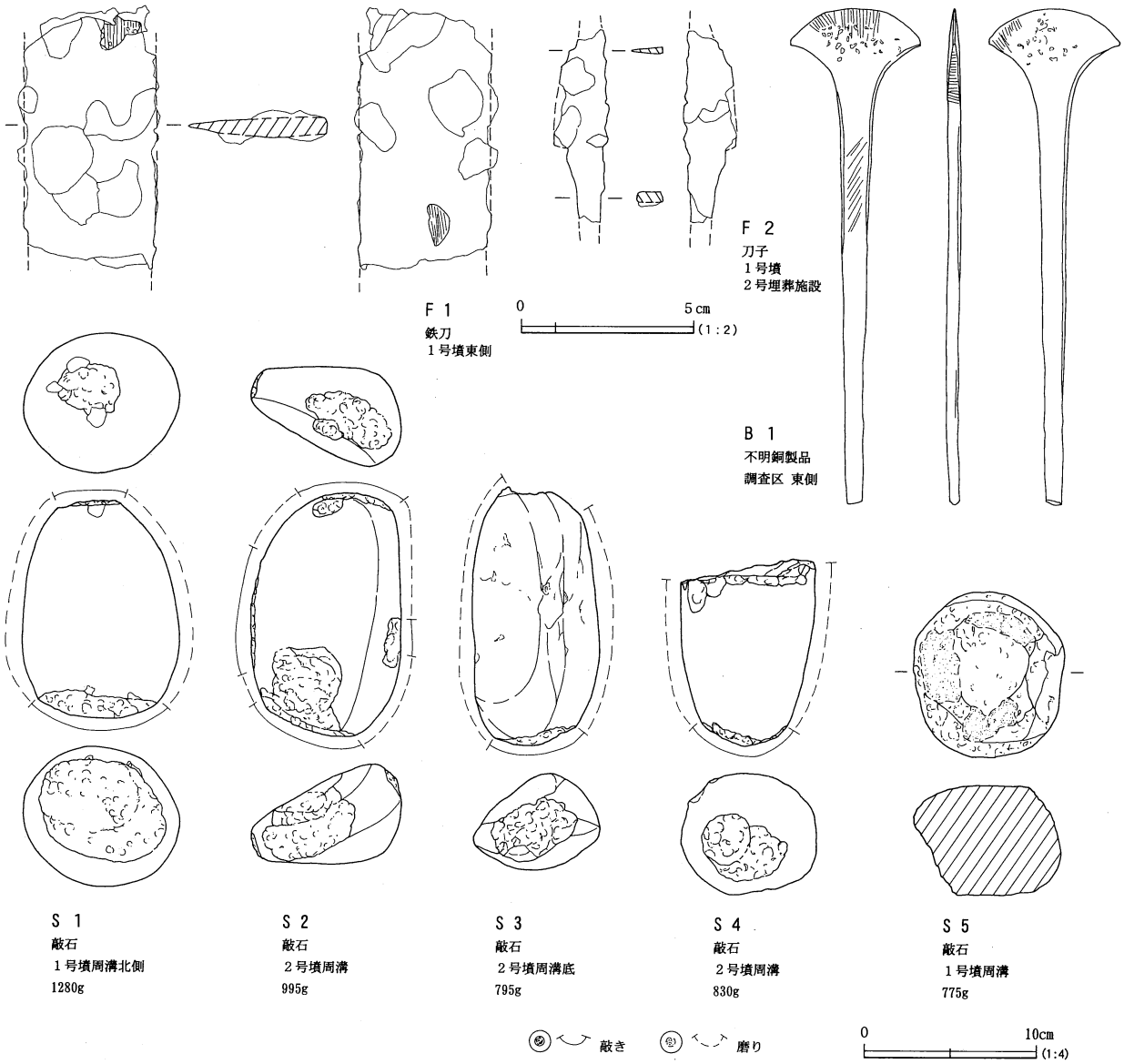
第9図　大平ラ遺跡出土土器2



第10図　大平ラ遺跡出土土器３

〔法量（　）は推定値〕

出土位置	No.	器種	法量(cm)	形態	手法	胎土　焼成　色調　遺存度
1号墳 墳丘南西側	19	須恵器 樽型瓶		体部は樽を横倒しした形をなす。体部外面には、2本の凹線と櫛描波状文による文様帯がめぐる。	体部の左右両側面は厚さ0.4～0.5cmの円形粘土板を外側から貼り付けている。体部と口頸部との接合方法は不明。	1mm以下の砂粒を含む。焼成普通。淡灰色。口縁部欠損。体部約1/3遺存。緑色の自然釉が認められる。
2号墳 墳丘東側	20	壷	口径　(33.6)	大型。退化した二重口縁。	口縁部内外面ヨコナデ。頸部外面縦方向のハケメ残る。頸部内面横方向のハケメ。	5mm以下の砂粒が含まれる。焼成普通。淡黄褐色。口縁部約1/6遺存。
2号墳 南東側周溝 埋土	21	甕	口径　(8.3) 最大胴径 (16.4)	口縁部は退化した二重口縁で、21・22は直立し口縁端部は内側に面をもつ。23はやや外方に立ち上がり口縁端部は凹面をなす。21は屈曲部内面に1条の沈線をめぐらす。22の屈曲部は強くヨコナデし稜をなす。体部は、21はなで肩の肩部に続き、胴部は大きく張る扁球形。22は体部球形。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ハケメ調整。21は上位横方向、下位斜方向、22は上位頸部まで斜方向、下位縦方向、23は肩部以下横方向のヘラケズリ。肩部内面及び底部内面指頭圧痕。	2mm以下の砂粒を含む。焼成良好。淡黄褐色。口縁部約3/4、体部約1/2欠損。
	22		口径　15.7 最大胴径 (24.8) 器高　24.8			5mm以下の砂粒を含む。焼成良好。淡黄褐色。体部約1/3欠損。体部外面煤付着。
	23		口径　(18.2)			3mm以下の砂粒を含む。焼成普通。淡黄褐色。口縁部約1/2、体部約2/3欠損。体部外面煤付着。
2号墳 南側周溝底	24	高坏	口径　22.0 脚径　13.2 器高　17.0	24・25は大型で、口縁部は直線的に外方にのび、口縁端部はわずかに外反し丸い。口縁部と坏底部との境に稜をもつ。26～29は皿状で、口縁部は直線的に上外方にのび、口縁端部は丸くおさめる。30・31は椀状で内湾気味。口縁端部は丸くおさめる。脚部は上位が先すぼまりで、下位が外方に開く柱状部と外方に大きく開く裾部。24・25は太短の脚部。脚部との接合は差し込み式。坏部と脚部との境に1条の沈線をめぐらす。柱状部から脚部にかけて強く屈曲する。	坏部外面縦方向のハケメ後ヨコナデ。31は型取り後の粘土のしわを残す。坏部内面は、24・25が六角形状横方向のヘラミガキで縦方向のハケメを残す。坏底部内面放射状の疎なヘラミガキ。26・27が五角形状横方向のヘラミガキ後放射状に密なヘラミガキで横方向のハケメ残し、28～31は全体に放射状の疎なヘラミガキ。柱状部外面面取り。24～29の内面絞り目残る。裾部内面横方向のハケメ、25は指頭圧痕残す。	3mm以下の砂粒を含む。焼成良好。赤褐色。完形。外面赤色顔料塗彩。
	25		口径　17.0 脚径　10.6 器高　13.4			1mm以下の砂粒を含む。焼成良好。赤褐色。完形。外面赤色顔料塗彩。
	26		口径　16.7 脚径　9.8 器高　11.9			1mm以下の砂粒を含む。焼成良好。赤褐色。完形。外面赤色顔料塗彩。
	27		口径　16.5 脚径　9.5 器高　11.8			1mm以下の砂粒を含む。焼成良好。赤褐色。完形。外面赤色顔料塗彩。
	28		口径　15.8 脚径　8.4 器高　11.0			2mm以下の砂粒を含む。焼成良好。橙褐色。完形。外面赤色顔料塗彩。
	29		口径　15.8 脚径　9.1 器高　12.4			1mm以下の砂粒を含む。焼成良好。橙褐色。ほぼ完形。外面赤色顔料塗彩。
	30		口径　16.0 脚径　9.4 器高　11.4			1mm以下の砂粒を含む。焼成良好。橙褐色。完形。外面・裾部内面赤色顔料塗彩。
	31		口径　14.4 脚径　9.8 器高　10.8			2mm以下の砂粒を含む。焼成良好。橙褐色。完形。外面赤色顔料塗彩。坏部外面黒斑あり。
2号墳 東側周溝底	32	須恵器 小型瓶	最大胴径 10.2	口縁部は一旦外反して稜をもち上外方へのびる。頸部と口縁部との境界にはわずかにつまみだした稜をもつ。外面頸部、胴部最大位櫛描波状文がめぐる。体部は肩が張らない。胴部最大位に円孔を穿つ。	口縁部内外面ヨコナデ。底部内面棒状工具による圧痕。	2mm以下の砂粒を含む。焼成良好。淡黄褐色。口縁部欠損。
2号墳 東側周溝埋土	33	須恵器 甕	口径　(19.6)	中型。口縁部は朝顔形に外反し、端部は上下に鋭い稜をもつ。口縁端部近くに断面三角形の突帯を2条めぐらし、その上下に櫛描波状文を施す。	口縁部内外面丁寧なヨコナデ。体部外面は平行叩き目文を残す。体部内面は同心円文をナデ消す。	1mm以下の砂粒を含む。焼成良好。青灰色、断面赤紫色。口縁部約1/4遺存。
	34	須恵器 無蓋高坏	口径　(14.8)	口縁部は外反し、口縁端部は丸くおさめる。口縁部外面櫛描波状文がめぐる。坏底部片に透し穿孔時のキズ有り。	口縁部内外面丁寧なヨコナデ。坏部外面時計回りのヘラケズリ。	精良。焼成良好。赤紫色。坏部約1/8遺存。外面黒色の自然釉。
1号墳 東側周溝埋土	35	坏	口径　(12.7)	口縁部は内湾し口縁端部は丸くおさめる。	口縁部内外面ヨコナデ。	精良。焼成良好。淡褐色。底部約1/3欠損。底部外面を除き赤色顔料塗彩。
2号墳 東側周溝埋土	36	須恵器 台付 長頸壷	最大胴径 (17.4)	体部は扁球形で、底部外周から外側へふんばった短い高台が付く。	体部外面肩部以下丁寧なヘラケズリ。	1mm以下の砂粒を含む。焼成普通。淡灰色。口縁部欠損、体部約1/3欠損。



第11図　大平ラ遺跡出土鉄製品・銅製品・石製品

3　まとめ

倉吉市和田字大平ラに所在する大平ラ遺跡において実施した発掘調査の概要について述べた。調査によって、円墳２基、土壙１基を検出した。調査地区は丘陵の中腹であり、古墳群はさらに同一丘陵の東側に広がるため、今回確認した古墳はこのうちの一部であり、古墳群の全容は不明である。以下、調査によって明らかになったことを整理しまとめとする。

墳丘　調査した古墳はともに円墳で、尾根筋に連続して築造され、尾根の高い側に１号墳、その西側に接して２号墳が位置する。周溝を含めた墳丘の規模は、１号墳約22m、２号墳約16mを測り１号墳が大きい。墳丘盛土は、旧地表面の黒色土層面から周溝を掘り下げた際の土を盛土している。

周溝　１号墳・２号墳ともに墳丘を北東側から南西側へ半周する。１号墳の西側は２号墳に切られる。周溝の断面形態は、１号墳南東側が逆台形を呈する他は、緩やかなU字形を呈する。周溝はともに尾根筋の高い側から南側にかけて掘り込まれており、墳丘の南東側を意識している。

埋葬施設　１号墳から周溝内埋葬施設３基、周溝外埋葬施設１基、２号墳から主体部１基を検出した。内訳は、１号墳１号・２号埋葬施設は土壙墓、３号埋葬施設は木棺墓、４号埋葬施設は石材を併用した木棺墓、２号墳主体部は箱式石棺墓であった。１号墳の主体部は削平され遺存していないが、墳丘上の表土中に板石が含まれることから、２号墳同様に箱式石棺墓が想定される。主体部以外の埋葬施設については、１号墳では周溝内外に４基の埋葬施設が造られているが、２号墳には周溝内外に埋葬施設は造られていない。

供献土器　出土位置は、1号墳の土師器大型壷及び須恵器樽型瓹が、墳丘流土中からも出土しているが、周溝底、埋土中での出土がほとんどであった。

出土状況は、周溝内に転落した状態で出土したものと、周溝底に供献され原位置で出土したものがある。前者には１号墳周溝内の土師器大型壷(２)、須恵器小型瓹(17)・樽型瓹(19)・中型甕(18)、２号墳周溝内の土師器大型壷(20)・甕(21～23)、須恵器中型甕(33)・無蓋高坏(24)がある。１号墳・２号墳に共通する器種は、土師器大型壷、須恵器中型甕である。後者には１号墳南側周溝底の土師器直口壷(１)・甕(３～５)・高坏(６～13)、須恵器坏蓋(15)・坏身(16)、東側周溝底の土師器椀(14)、２号墳南側周溝底の土師器高坏(24～31)、東側周溝底の須恵器小型瓹(32)がある。周溝底から出土したものは、南側及び東側に位置する。２号墳では、主体部の主軸延長線上に須恵器小型瓹(32)、短軸延長線上に土師器高坏(24～31)が供献されている。周溝底の供献土器は、周溝内埋葬施設ではなく主体部に対して供献されたものであり、出土状況からみると、主体部に対して長軸あるいは短軸延長線上に位置する傾向がある。

供献の時期については、周溝底に供献され原位置で出土したものが比較的底面に近い位置で出土していることから、周溝が掘られてから埋まる過程の比較的早い段階であると考えられる。

古墳ごとの供献土器の器種・個体数については次の表に示した。

器種	土師器									須恵器					
	壷		甕		高坏				椀	坏		瓹		甕	無蓋高坏
	直口	大型	中型	小型	段 大	段 小	皿状	椀状		蓋	身	小型	樽型	中型	
1号墳	①	1	③		①	①	④	②	①	①	①	1	1	1	
2号墳		1	2	1	①	①	④	②				①		1	1

○数字：原位置出土

出土した器種については、土師器は高坏が中心で、1号墳南側周溝底の高坏群では、土師器直口壷・甕、須恵器蓋坏のセットが同時期に供献されているが、2号墳南側周溝底では高坏以外の器種はない。

次に、1号墳・2号墳に共通して出土した供献土器を個々に比較し時期差を検討する。土師器では墳丘の大型壷、周溝底の高坏群、須恵器では小型瓹・中型甕がみられる。土師器大型壷はともに退化した二重口縁で大型である。壷2に比べ壷20は頸部の傾きがなく口縁端部まで直線的に立ち上がり、後出的要素をもつ。口縁部ヨコナデ、頸部以下体部内外面ハケメ調整を施す。出土状況から、墳頂部供献と推測されるが、壷2の頸部内面にアスファルト状の黒色物質が僅かに認められることから、土器棺としての可能性も考えられる。土師器高坏は、1号墳・2号墳ともに器形・個体数は一致し、法量・胎土も類似する。1号墳高坏6～13は、ハケメ調整が細かくヘラミガキは細く密で、赤色顔料は内外面に塗彩される。2号墳高坏24～31は、ハケメ調整が粗くヘラミガキは太く疎で、赤色顔料は外面にのみ塗彩される。両者を比較すると、1号墳出土高坏は丁寧な調整が施されるが、2号墳では調整にやや簡略化される傾向が見られ後出的である。また、1号墳出土高坏8～11は焼き歪みが著しく坏部が変形するが、2号墳出土高坏には焼き歪みの著しいものはみられない。

須恵器瓹の体部は、17はやや肩が張るいちじく形を呈する。形態・手法から17・32はともに陶邑編年[註1)]のＴＫ47に並行する。最大胴部外面は、17はハケメ原体による列点文、32は波状文を施文しており、17は外面の装飾の簡略化が進み後出的である。須恵器中型甕は1号墳18・2号墳33の形態・法量ともほぼ類似する。頸部外面は18は無紋、33は2条の突帯が巡り波状文が施文される。体部内面は当て具痕跡をナデ消しする。口縁端部の稜は、33のほうが鋭くＴＫ208、18はややあまくＴＫ23に並行する。供献土器は、1号墳・2号墳ともに器種・個体数が一致するもの、時期の前後するものがみられることからほぼ同時期の供献と考える。

土師器高坏を中心とした供献土器の周溝内出土例は、倉吉市を中心に管見するかぎりでは5世紀後半以降に多くみられ、7遺跡13基（倉吉市駄道東1号墳・7号墳[註2)]、下張坪32号墳・34号墳・63号墳・66号墳[註3)]、沢ベリ15号墳[註4)]、イザ原19号墳・20号墳[註5)]、小林3号墳[註5)]、東山田1号墳[註6)]、東伯郡羽合町長瀬高浜11号墳・71号墳[註7･8)]）で、良好な状態で出土している。今回調査した大平ラ遺跡の2基を合わせると、8遺跡15基にみられる。

供献位置は、主体部が遺存する5基のうち、主体部短軸延長線上に位置するもの3基、約45度に位置するものが2基みられ、主体部短軸延長線上あるいはこれに近い位置に供献する傾向がみられた。

高坏の器形・個体数を比較すると、器形に統一性はなく、個体数も1～8個体がみられ、両者に規則性はみられない。大平ラ遺跡では、器形・個体数ともに一致するが、他の古墳群では何らかの規則性は見出せなかった。

供献状況が、全て正位の状態は、沢ベリ15号墳、全て逆位の状態は東山田1号墳であった。大平ラ1号墳で正位の状態が1個体みられた。また、全体的にみて逆位の状態の高坏は1～2個体が各古墳でみられる。その他は基本的に倒位の状態であった。大平ラ遺跡でも、1号墳・2号墳ともに逆位の状態の高坏が2個体ある。

古墳の時期とあり方　古墳の築造時期については主体部が失われており、それに伴う確実な遺物もない。周溝に転落した土器はおそらく主体部の供献と推定され、前述したとおり、5世紀後半のものである。このことから、両墳とも時期差なく相次いで築造され、周溝内での供献も比較的短期間に行われたと考えられる。古墳の造営はそれに先立つものであることは間違いない。古墳が接しており、共に円墳であることを考えると、被葬者は同一集団のごく近い関係を有するものであったと考えられる。本古墳群と同様の古墳群は、ともに丘陵尾根に近接して営まれ、かつ墳丘規模等で大きく差が見られない特色を有している。大平ラ遺跡の古墳が造営される5世紀後半の段階に、直径が20m以下の比較的小規模な墳丘を有し、箱式石棺墓を主体とする古墳が増加する傾向がみられる。

今回の調査では、5世紀後半に造られた円墳を調査したが、後世の削平により主体部は遺存していなかった。しかし、周溝内において比較的良好な状態で供献土器を検出することができた。なかでも高坏は、両墳とも同じ位置から同形・同数が出土し、隣り合う古墳間での供献土器について類似性を確認することができた。今回の調査は、丘陵全体のごく一部の調査で、尾根に連続する古墳群のなかでの位置付けはわからない。今後の調査進展による資料の増加を待って検討されなければならない。

註

1　田辺昭三　『須恵器大成』　角川書店　1981

2　森下哲哉　『駄道東遺跡発掘調査報告書』　倉吉市教育委員会　1999

3　森下哲哉　『下張坪遺跡発掘調査報告書』　倉吉市教育委員会　1997

4　岡本智則　「沢ベリ遺跡2次調査」『不入岡遺跡群発掘調査報告書』　倉吉市教育委員会　1996

5　根鈴輝雄　『イザ原古墳群・小林古墳群発掘調査報告書』　倉吉市教育委員会　1983

6　国田修二郎　『東山田1号墳発掘調査報告書』　倉吉市教育委員会　1987

7　『長瀬高浜遺跡発掘調査報告書　Ⅳ』　財団法人　鳥取県教育文化財団　1982

8　『長瀬高浜遺跡発掘調査報告書　Ⅴ』　財団法人　鳥取県教育文化財団　1983

参考文献

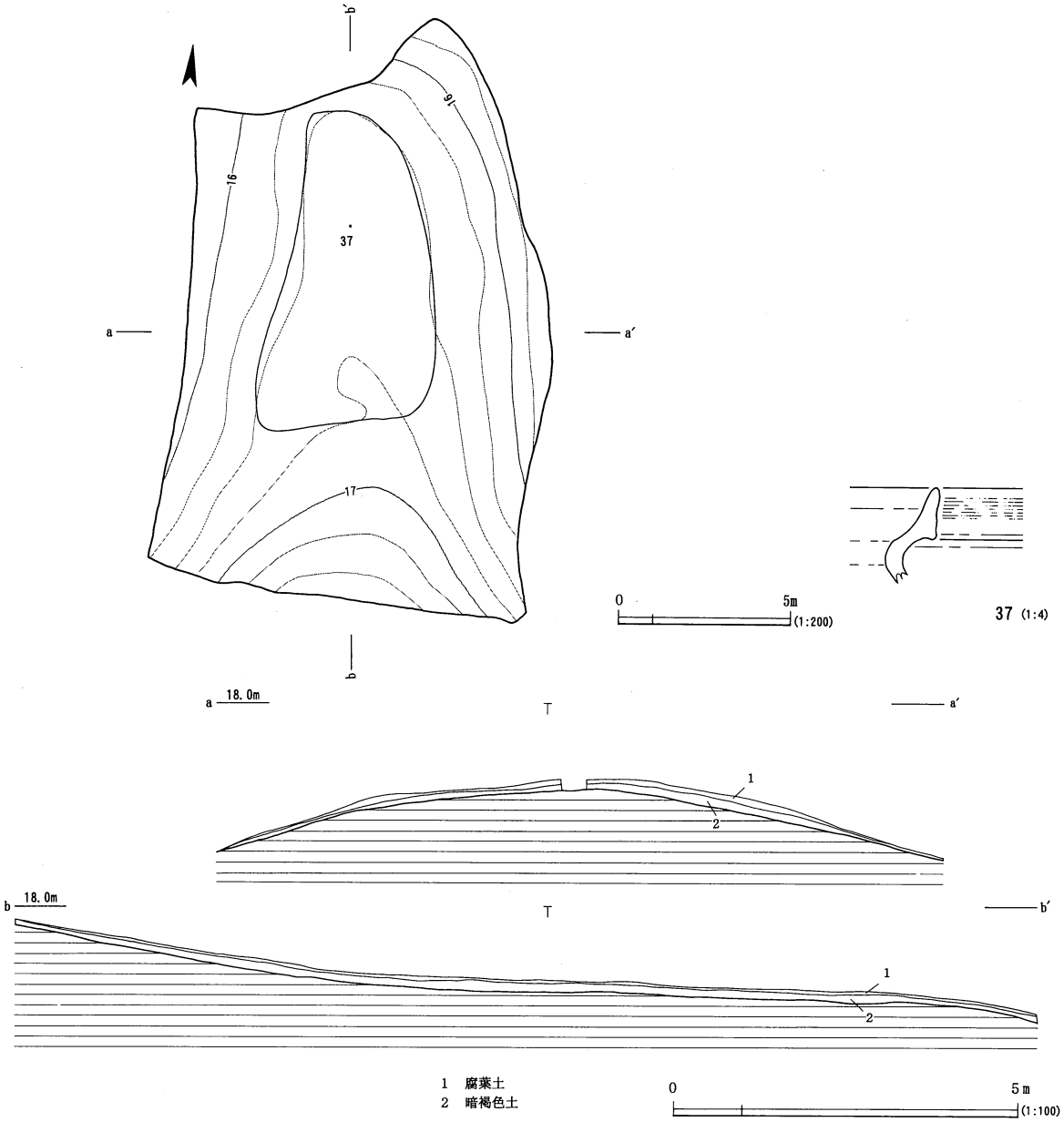
竹宮亜也子　『立道東古墳群発掘調査報告書』　倉吉市教育委員会　1993

眞田廣幸　『立縫遺跡群Ⅳ　大山遺跡発掘調査報告書（C・D地区）』　倉吉市教育委員会　1988

Ⅳ　八幡山遺跡

八幡山遺跡の調査は、調査地の地形測量を行い、地形図（1:100）を作成した後、南北方向に延びる尾根筋に平行して平坦部の中心線を直線でのばし、平坦部分のほぼ中心付近で直交させた直線を東西方向に延長して、調査区を４区画に分け、各区にはそれぞれ断面観察用のベルトを設定して行った。平坦部の調査は、表土を除去して範囲を確認した後、調査後の地形図（1:100）を作成し終了した。

調査地の基本層序は、Ⅰ層：表土、Ⅱ層：暗褐色土、Ⅲ層：橙褐色土（礫混じり粘質土）である。遺構検出は、Ⅲ層上面で行った。調査後の面積は120㎡である。調査の結果、平坦部１を検出した。



第12図　八幡山遺跡遺構全体図　断面図、出土土器

1　遺構

1号平坦部　調査区の中央から北側にかけての尾根筋部分、標高約16.5m付近で南北長約9m、東西幅約3～5mの平坦部分を確認した。北面する水田面との比高差は約12mを測る。面積約35.7㎡。内縁線・肩は不明瞭で平坦面も平滑ではない。

2　遺物

平坦部のほぼ中央から北寄りの遺構検出面で弥生土器ほぼ1個体(37)が出土した。口縁部は直線的に外傾し、口縁端部は丸くおさめる。口縁屈曲部はわずかに下垂する。口縁部外面櫛描平行沈線。内面磨滅著しい。胎土は1㎜以下の砂粒を含む。暗黄褐色。焼成普通。口縁部～体部約3分の1遺存。土器の形態・手法から既存の編年にあてはめると、土井編年[註1)]の阿弥大寺期に併行するものである。

3　まとめ

八幡山遺跡は、大山から北に延びる丘陵と蜘ヶ家山に挟まれた南北に長い谷の最深部に位置する。発掘調査の結果、尾根上に平坦部を確認した。

今回の調査では、弥生時代後期の甕を伴う平坦部を確認した。しかし、本来の尾根先端部分が後世の水田開発に伴い消失しており旧地形をとどめておらず、焼土面やピット等も無いため、平坦部の性格付けは困難である。

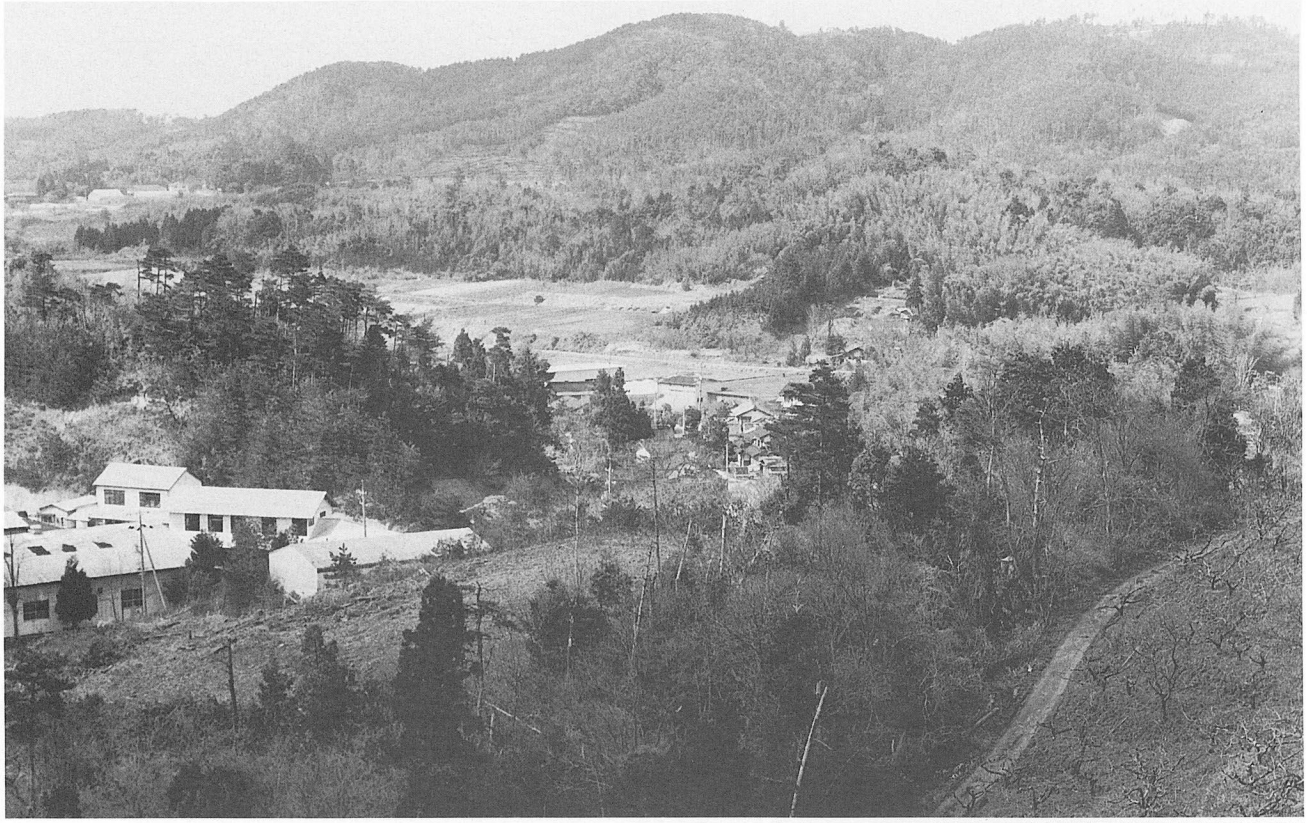
本遺跡の周辺には、直線距離にして約100m離れた本丘陵と並行して北に延びる丘陵の最北端に米里銅鐸出土地、約600m北西に弥生時代後期から古墳時代にかけての住居址や貯蔵穴を確認した米里三嵜遺跡[註2)]等があり、狭い平野部を囲む丘陵の尾根から裾部分にかけて弥生時代から古墳時代の遺跡が点在する。今回の調査では、ごく狭い範囲での調査であり、遺跡の性格については明らかでない。

本遺跡周辺の調査例の増加を待ち、今後の研究課題としたい。

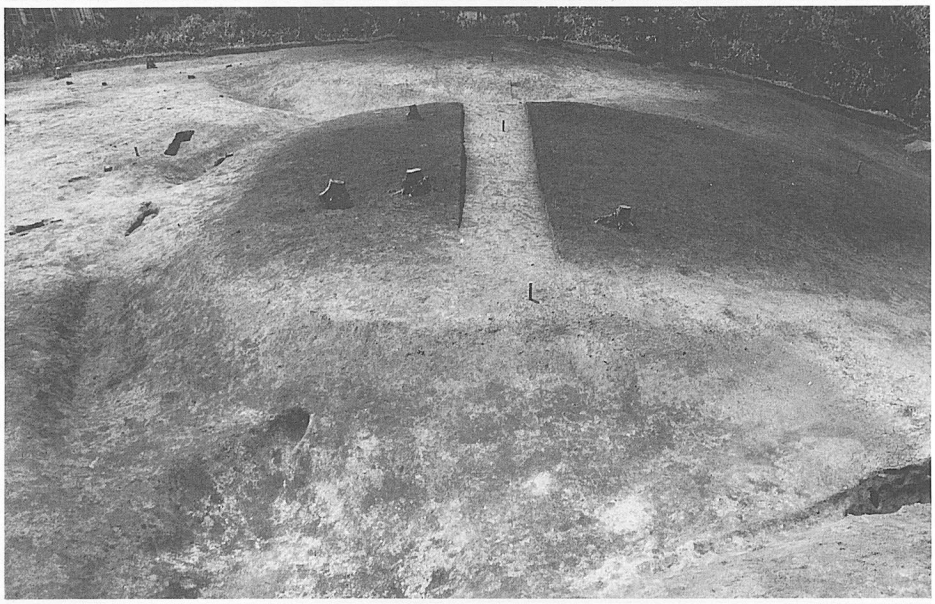
註

1　土井珠美　「鳥取県下の状況」『弥生時代後期から古墳時代初頭のいわゆる山陰系土器について』 第18回埋蔵文化財研究会事務局 1986

2　八峠　興　「米里三ノ嵜遺跡」『島古墳群・米里三ノ嵜遺跡・北尾釜谷遺跡（北尾古墳群)』 財団法人　鳥取県教育文化財団 2000



大平ラ遺跡調査前遠景（南から）



1 号墳完掘（東から）

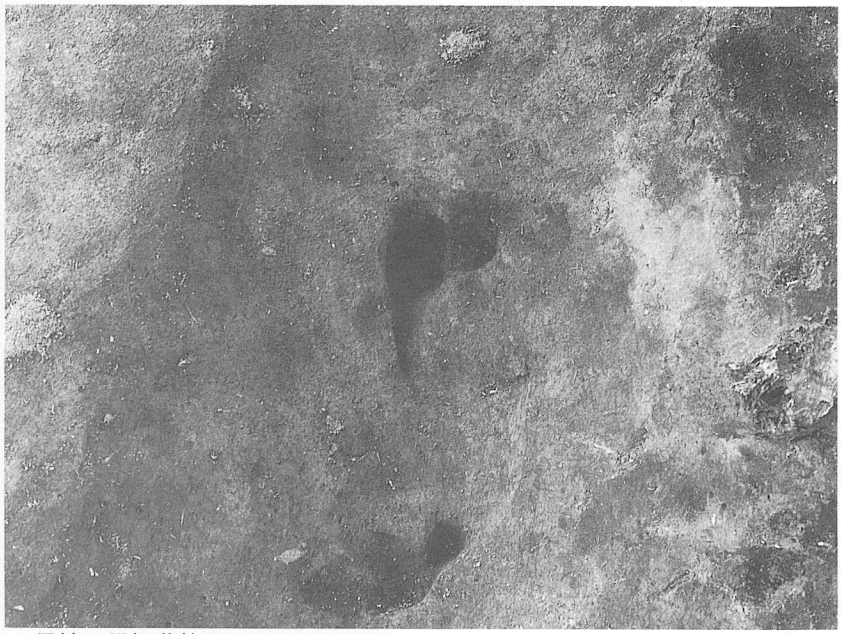
（南西から）

図版 2

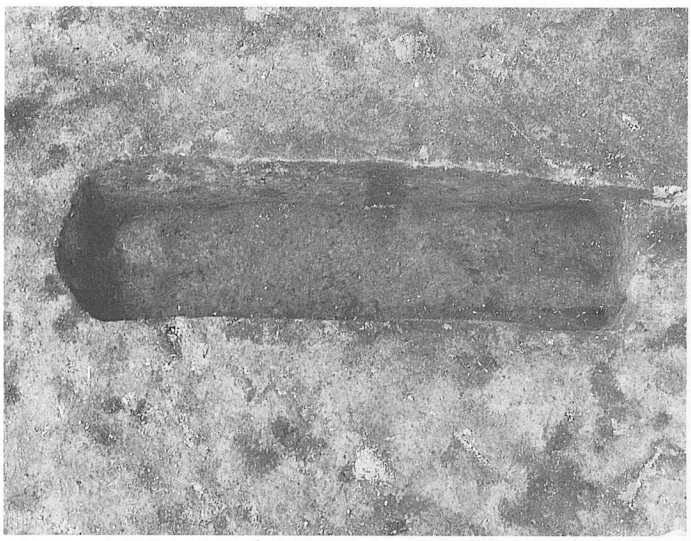
1 号墳東側周溝埋土（南から）

1 号墳周溝内供献土器出土状況（北から）

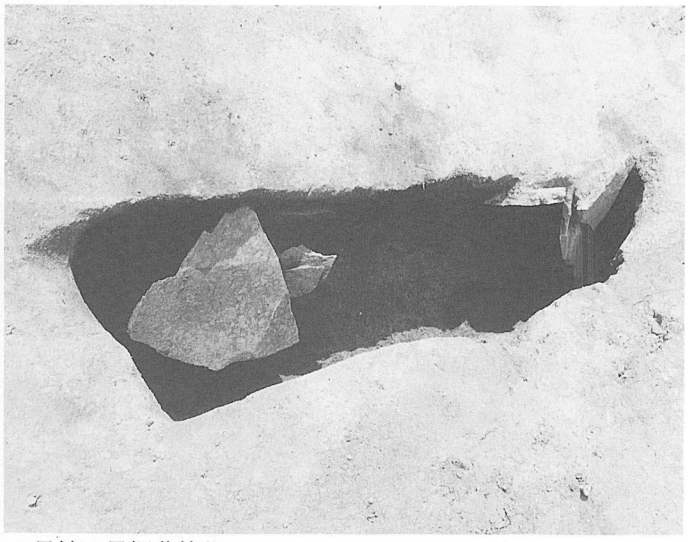
1 号墳 1 号埋葬施設（西から）



1 号墳 2 号埋葬施設（南東から）

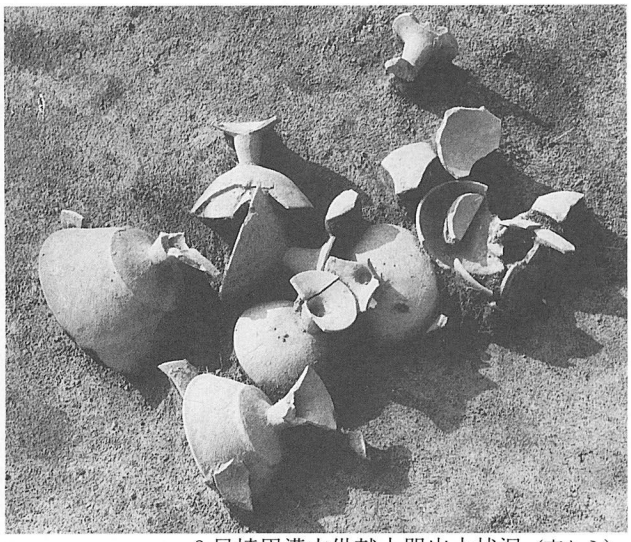


1 号墳 3 号埋葬施設（南から）

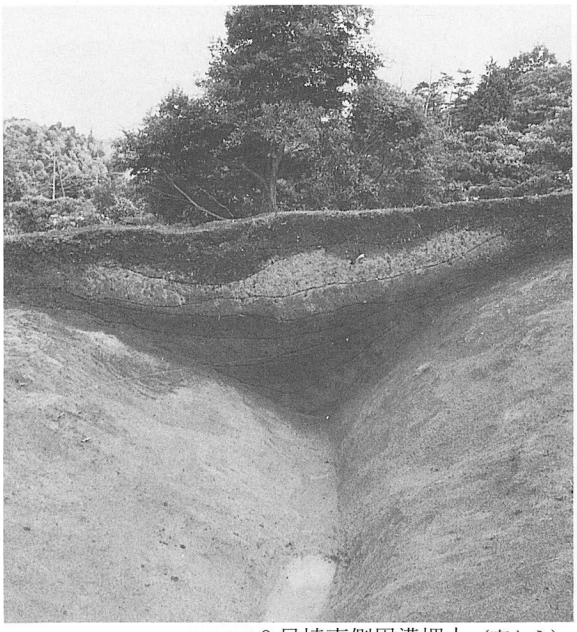


1 号墳 4 号埋葬施設（東から）

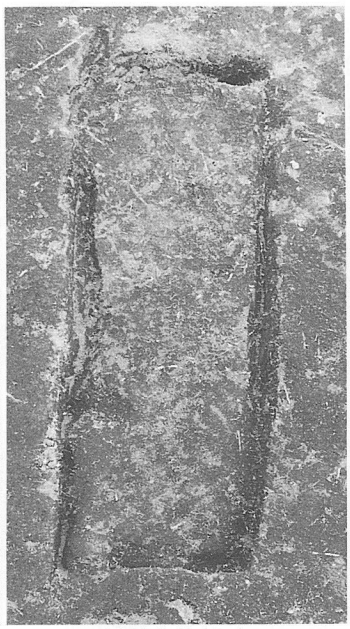
2 号墳（北から）



2 号墳周溝内供献土器出土状況（南から）



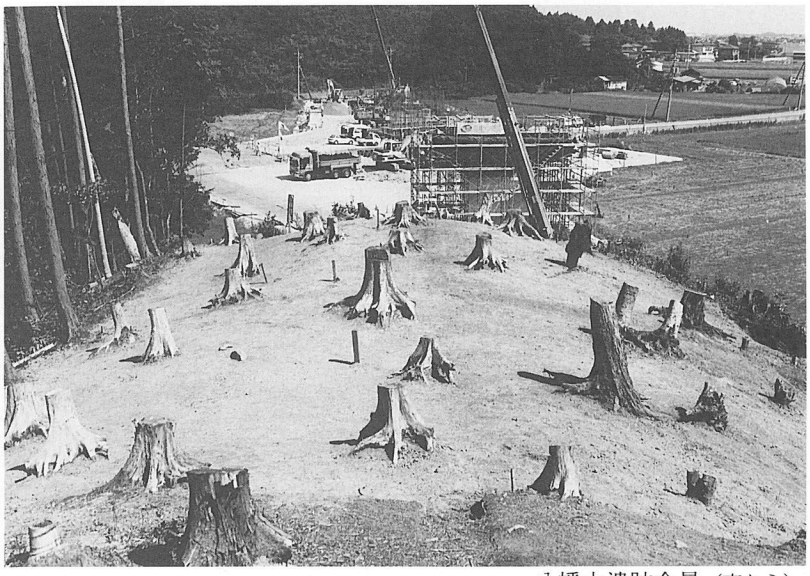
2 号墳東側周溝埋土（南から）



2 号墳主体部（南西から）

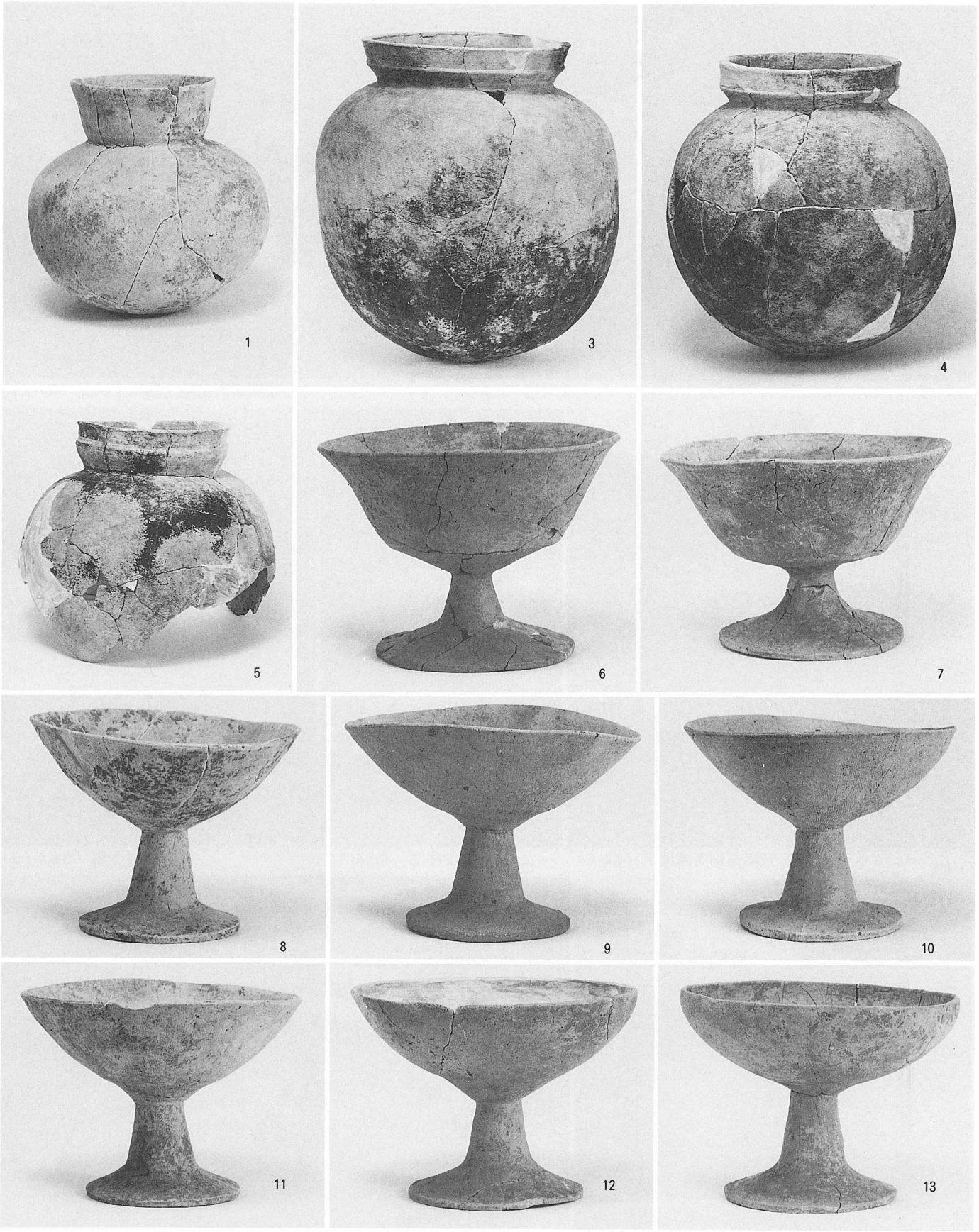
1 号土壙（南東から）

八幡山遺跡遠景（北東から）



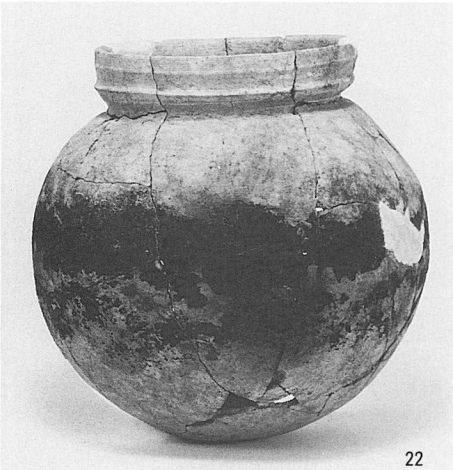
八幡山遺跡全景（南から）

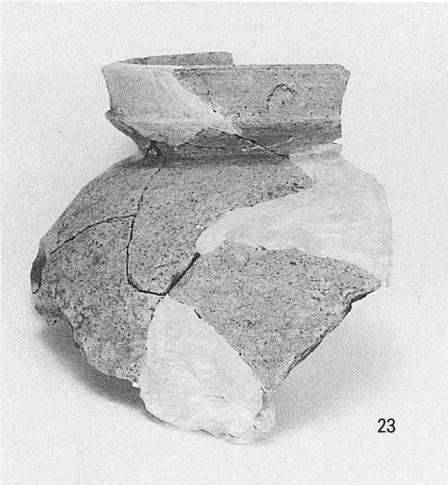
大平ラ遺跡　1号墳出土土器



20

21


22


23

24

25

26

27

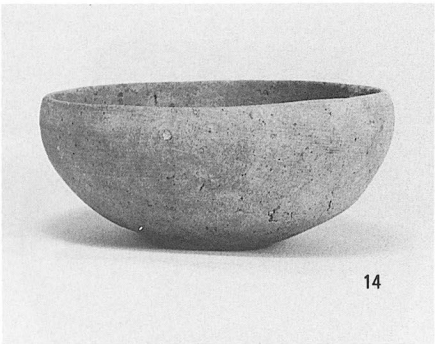
28

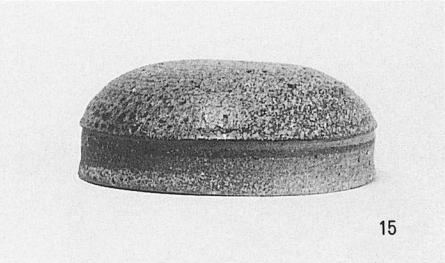
29

30

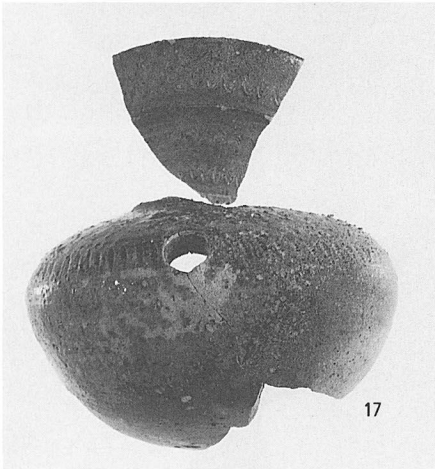
31

大平ラ遺跡 1号・2号墳出土土器


14

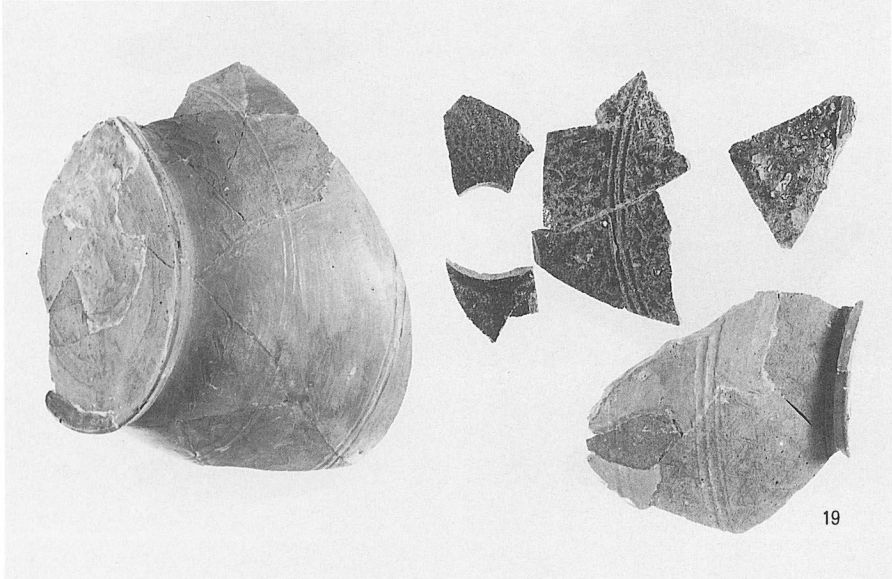

15

16

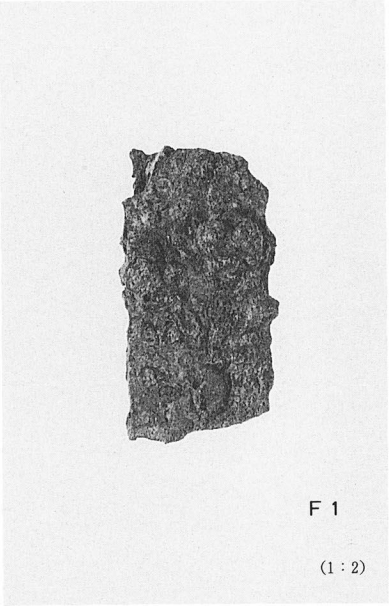

17

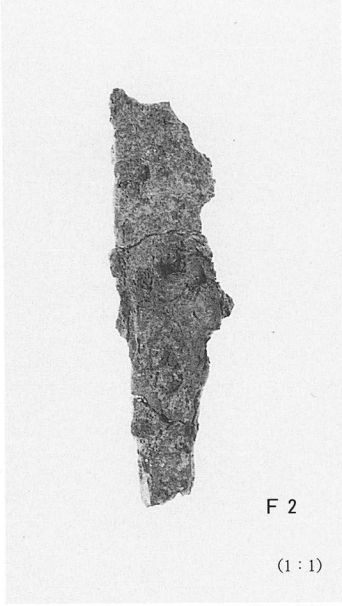
32

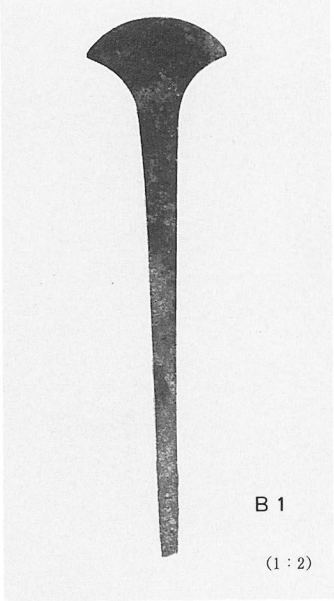
36

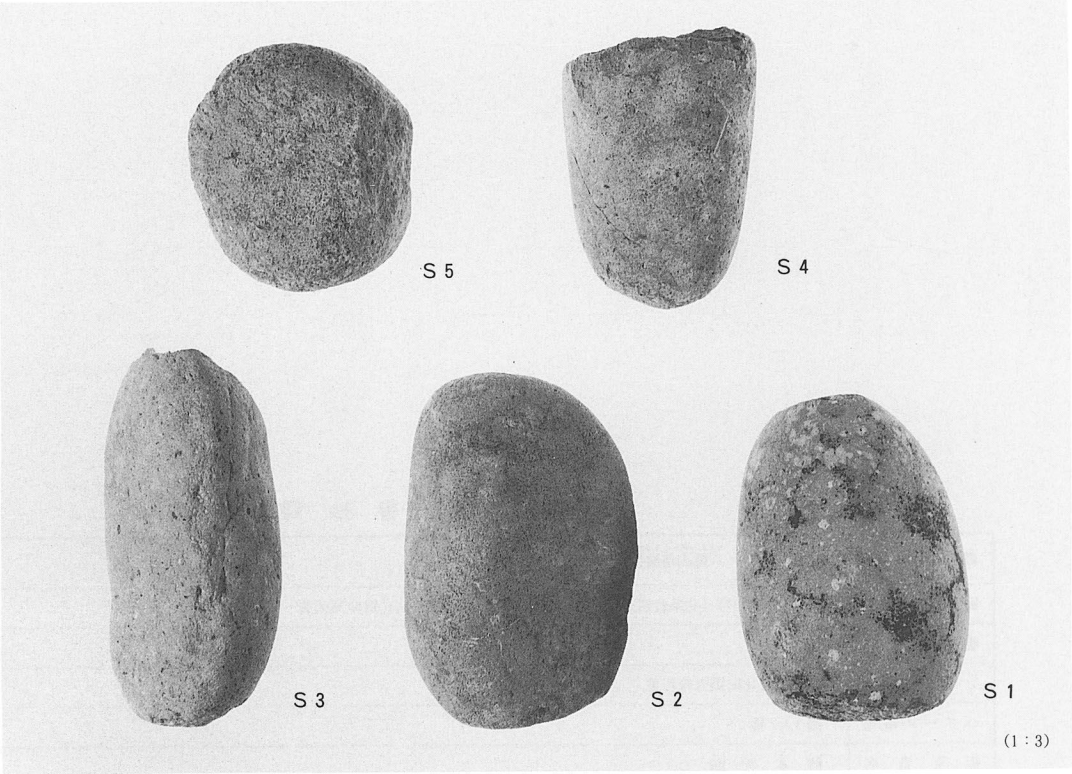

19

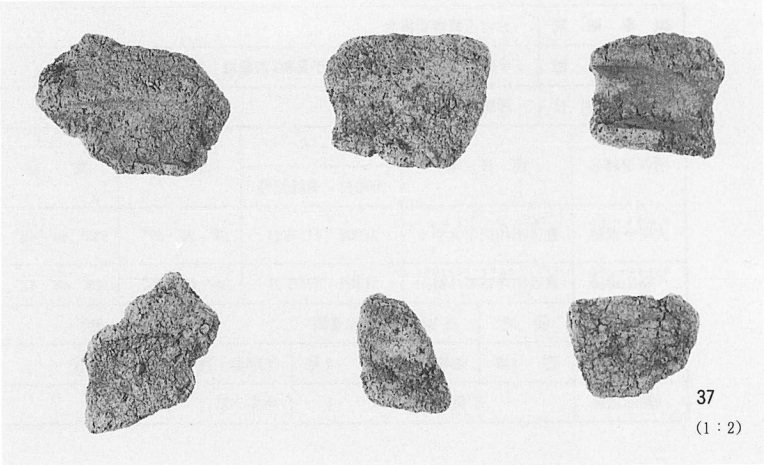
35


F 1
(1：2)


F 2
(1：1)


B 1
(1：2)


S 5
S 4
S 3
S 2
S 1
(1：3)


37
(1：2)

210.2
Kur
(112)
図書館

報告書抄録

書名	大平ラ遺跡・八幡山遺跡発掘調査報告書
副書名	一般国道313号（北条倉吉道路）道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査
巻次	—
シリーズ名	倉吉市文化財調査報告書
シリーズ番号	第112集
編著者名	岡本智則
編集機関	倉吉市教育委員会
所在地	〒682－8611　鳥取県倉吉市葵町722番地　TEL0858－22－4419
発行年月日	西暦2001年3月23日

所収遺跡名	所在地	コード 市町村：遺跡記号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
大平ラ遺跡	倉吉市和田字大平ラ	31203：4DWO	35°26′57″	133°48′48″	20000310～20000324 20000525～20000901	1,680㎡	一般国道313号（北条倉吉道路）道路改良工事に伴う事前調査
八幡山遺跡	倉吉市寺谷字八幡山	31203：3NTH	35°27′29″	133°48′43″	20000710～20000823	120㎡	

所収遺跡名	種別	主な時代：主な遺構	主な遺物	特記事項
大平ラ遺跡	古墳	古墳：円墳　2基	土師器・須恵器・鉄刀・刀子	丘陵尾根上に所在する5世紀後半の円墳。
八幡山遺跡		弥生：平坦部　1	弥生土器	丘陵尾根上に所在する弥生時代後期の平坦部。

大平ラ遺跡・八幡山遺跡発掘調査報告書
一般国道313号（北条倉吉道路）
道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査

平成13年３月23日　印刷
平成13年３月23日　発行

編集
発行　倉吉市教育委員会

印刷
製本　有限会社　鳥取県農協印刷